

俳句雜誌

令和二年三月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三卷第三号

水 明

2020 3月号



《今月のかな女》

雛見るや一人坐りて燭の下

(句集「龍膽」)

長谷川かな女

ひとりで雛壇を設え、一つ一つ
丁寧に雛人形を飾り、ほっとし
ているかな女。

雛人形は、かな女が娘時代から、
いや少女の頃から親しんできた
想い出の詰まったものかも知れ
ない。

柔らかな春の燈火の下で、雛と
一緒に、過ぎし日のことを懐か
しんでいるかな女である。

(鬼之介・註)

水 明

第1074号

— 華の一句 —

氏神の道を春着の裾捌き

井上玲子

風も無い小春日和の元日、華やかな春衣を着こなしたうら若い女人が、鎮守の杜の小道を歩いている。何か大切な願い事があるのだろう。一重瞼の瞳が輝き、その胸が弾んでいる。茶道や華道で和服を着こなしているのであろう見事な裾捌きに、行き交う人が見惚れている。

(鬼之介・推薦)

水 明

令和 2 年
3 月 号

華の一句

鶯 色 (作品)

山本鬼之介

4 1

ばらと楽譜 (近詠)

椎野美代子

6

冬霧の宿 (近詠)

大橋 旭代

7

雪 景 雪欄作家近詠鑑賞

町野 広子

8

硯箱 季音月評

井口 俊晴

10

季音「雪」 (同人作品)

網野 月を	石井 喜恵
石山 かつ子	ほか

12

季音「月」 (同人作品)

藤澤 喜久	鳥羽 和風
丸山 マスミ	ほか

19

季音「花」 (同人作品)

梅澤 佐江	井上 玲子
野口 和子	ほか

24

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

50

現代俳句鑑賞

網野 月を

28



水明集

飛永 鼓
大塚 茂子
青木 鶴城
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

44

水 琴 窟 (水明集一月号鑑賞)

池田 雅夫

48

俳誌望見

梅澤 佐江

53

句集喝采

近藤 徹平

54

新春俳句大会の記

野田 静香

64

大相撲初場所観戦

青木 鶴城

63

水明例会報・各地句会報

55・58

九十周年のご案内

66

全国大会兼題句募集

43

春の吟行会延期のお知らせ

52

風声・発展基金御礼

68・69

後記

70

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

鶯
色

山本 鬼之介

琴爪やいつのまにやら春の雪
洛外の秘佛をめぐる日の余寒
つつがなき米寿の指よ春裕

下 萌 や 仙 洞 御 所 は こ の 辺 り
上 枝 の 鶯 を よ ぶ 五 色 豆
何 時 に な き 女 医 の 横 顔 春 の 風 邪
拗 ね 者 よ 鉄 路 の 野 火 を 追 ふ 眼
虚 無 僧 の 現 れ さ う な 夕 霞

ばらと楽譜

椎野 美代子

冬のばら花より棘の語りかな
冬のばら致死量ならむ棘棘棘
冬ばらや金輪際のいろ絞る
冬のばら鏡面なせる黒曜石
吐息せば烟るましろき冬のばら
遺されし楽譜冬ばら低くうたふ
冬のばら和紙の乾きをそのままに

よくもまあ厭さずに又、「薔薇」を詠んでしまったと胸に呟いている。五月の「薔薇」は「薔薇」であり、冬の「薔薇」は「ばら」である。この私的な感覚的表記の観念を説明できない。甚だ以ての不遜を承知の上、解っていただけは思わずハグの衝動に駆られるほど嬉しいのです。公園の「ばら」は消毒液をかぶり、白じら竦んでいました。

冬霧の宿

大橋 勉 代

大 齋 原 の 木 洩 れ 日 は 箔 笹 子 鳴 く
冬 棚 田 水 車 に 和 す る 赤 蛙
鯉 ね ら ふ 鼬 と 爺 の 知 恵 競 べ
冬 霧 の 宿 の 亭 主 の 誉 め 上 手
暖 炉 爆 ぜ 放 蕩 話 た け な は に
よ こ た は る 玻 璃 天 井 の 冬 銀 河
冬 霧 に 髪 を 濡 ら し つ 連 写 せ り

「三日間断水」突然の知らせに驚き、水の確保に東奔西走。給水器七個、飲料水五箱、炊事にペットボトル五十本、トイレ用に漬物樽、ゴミ箱三個をきれいに洗って満水し外回りにずらり。冷凍食品、紙コップ、紙皿、と足腰の痛くなるまで買い備えに走り回りました。

結局、断水は一晚で回避できたので、災害の予行演習と思ひ直す三日間でした。

何も起きない普段の生活がいかに幸せなことかと思ひ知らされた一月二十日でした。

雪景

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野 広子

◇一の糸（十二月号）

由良ゆら女

◇令和元年十月（十二月号）

網野 月を

満席の頭上に冴ゆる一の糸
行く年の背あざやかに主遣ひ

浄瑠璃を伴奏する太棹の一の糸は天を現わすとか。年の暮のこの日、座は満席。開演を心待ちに、しんと静まる人々の頭上に一の糸が弾かれた。待ち望んだ一瞬を張り詰めた空気が伝わる。二句目、三味と大夫の語りに合わせて操る人形は、指や目の動きがまるで人間のようであり、名人の技は見事の一言に尽きる上、背中に気迫を感じる。至福の一時。

しぐるるや睫毛ににじむなにわ橋

浄瑠璃の帰り座を出ると外は時雨でいる。傘は不要な程度の時雨。夕暮の浪花の街を人々に流されつつ家路を急ぐ。わが町のいつも見慣れた、歩き慣れた橋に改めて、えも言われぬ愛着を感じる。「睫毛ににじむ」に作者の心情が伝わる。

乾杯にポインセチアが声合はす

クリスマス的一句。今夜は子供家族が親元に集合。室内には赤いポインセチアが彩を添える。母の心尽しの手料理や子供達の持ち込んだケーキや肉が所狭しと並べられた。

「乾杯！」ジュースやワインでパティが始まる。幸せな一幕にポインセチアも唱和する。臨場感のある御句である。

台風禍夜空に光るまるきもの
サイレンや午前三時の静寂を

元号の変わった今年は、大きな災害が何度も日本を襲った。台風や大雨による家屋の倒壊、川の氾濫、水没する道路、田畑、家屋。電柱や木々が倒れ救助の車も先に進めない。一句目はその禍のあとの夜空に見た月。屋根の抜けた家からも見えたであろう月。自然とは美しくも残酷な物である。二句目午前三時真夜中のサイレン。只事ではない不安が募る。堤防の欠壊か注意を喚起する音。「を」で終わり想像が膨らむ。

ラグビー場神風きたる神無月

天災が多く打ち拉がれていた日本中の人々に大きな希望と勇気を与えてくれたのが、日本で開催されたラグビーワールドカップ。ベスト8と言う快挙を成し遂げた。ルールも知らなかった俄ファンが町中に溢れ（筆者も然り）連日テレビに釘付けになった。頑丈な男達の本気の体当たり。試合後のノーサイドの潔さ。結束のワンチームに神風が吹いたのである。

一年や傘はいらない光二の忌

光二前主宰がご逝去されてはや一年。故人のお人柄の通りいつ、どんな時にも晴れるのであった。一周忌のこの日もや

はり。「傘はいらない」が故人を言い得ている。今更ながら月日の早さに驚くと共に悲しみも甦って来る。

◇秋から冬へ（一月号）

石井 喜恵

後れ毛のピアスに絡む秋の暮
吾亦紅の未熟な紅のひとつ揺れ

耳の後側で止めてあるピアスの針に絡んだ後れ毛。掲句の女性は作者であろうか。秋の暮が一層の憂いを感じさせる。二句目の吾亦紅を「未熟な紅」と詠んだ所が、一句目の女性とも重なり、吾亦紅の可愛さと女性が上手くマッチしていて居ながらにして、風や風景が見えて来る。

落葉松や霧のテラスでハーブティ
木の葉散る小さく掛けて茶屋の椅子

二十メートルにも達する落葉松の、それは見事に紅葉し息を飲む程の美しさ。高原は秋の気配で霧が出て空気もひんやり。テラスでのお茶がおしゃれ。二句目「小さく掛けて」に茶店の佇まいや、何もかもが小振りの店内に心が広がる。秋の風景の洋と和を、木や場所で表現している巧みさ。

初時雨土産に重きジャムの瓶

土産を選ぶ事も旅の楽しみの一つ。自分用を含め相手の顔を思い浮かべ乍らあれこれ見て回る。作者は、重いのを承知で、やはりジャムに決めた。空気の澄んだ高原ジャムは喜ばれる事間違いない。外は時雨、一足早く高原は冬に入る。

◇洛陽拾遺（二月号）

五明 昇

京洛の秋暑を凌ぐ茶漬飯

京都には菓子や漬物・豆腐・鱧などの美味しい物や珍しい物など多々ある。秋暑を凌ぐには、さっぱりと茶漬が良い。小鉢に入った数種の漬物で何膳もお代わりがしたい。

「一澤帆布」背中に軽き小六月

京都にのみある鞆店で、帆布を素材に一点ずつ手作りしている。固有名詞にインパクトがあり、しかも世に色々な型の鞆があるにもかかわらず「一澤帆布背中に」でリュックを背にしている作者が見える。この丈夫で軽いリュックで京の町を思う存分満喫。旅には両手が自由になる軽いリュックが最高である。小六月に足取りの軽さも伝わる。

初しぐれ濡らすに惜しき蛇の目傘

冬ざれや町屋に遺る刀疵

和紙に荏油をひいた物で作った和傘。昨今ではカラフルでデザイン性に勝れた物も多いかと思うが、何れを選んでも飾って置きたい程美しい。本来の目的ではあるが濡らすに惜しいは共感。二句目幕末に起った池田屋事件が例にあるように、未だ其処此処に古い町家の残る京都では、何げない民家の柱や壁に往事の歴史が見られる。その一つに刀疵があり、見る人に大きな愕きと感動を与え、改めて京都の歴史の長さをも思い知らされるのである。

四季を通して美しく、日本が誇れる古都京の町である。

硯箱

◆季音一月

井口俊晴

海神となりし学徒や冬ざるる

小林萬二郎

戦後生まれが人口の八割を超えている今日、学徒動員という言葉は死語と言われるだろう。しかし、青春の真つただ中で死んでいった若者は数えきれない。若き海軍中尉だった筆者の叔父も、昭和十八年十二月、八丈島南方で航空母艦が潜水艦によって撃沈され戦死した。もとより遺骨などなく、海藻屑となった。「冬ざるる」の五文字が哀切である。

露寒や小犬三匹曳く女 服部みどり

犬が好きである。「お孫さんより可愛いでしょう」などからかわれる。それくらいだから、この句は当然すぐ目についた。寒い朝、飼主の女性に曳かれ、チヨコチヨコ一生懸命歩いて行く小犬。寒いといけないからと、お揃いの洋服まで着せてもらって、お互いぶつかったり離れたり、お散歩が嬉しくてたまらない様子だ。

一匹より三匹、性格はちよつとずつ違うが、じゃれ合つて

いられるから、すごく楽しいのである。

烏瓜霜の帽子が似合ふげな 森 千代子

散歩の途中で烏瓜を見かけた。柿の老木の枝から、つるんとした朱色の実がぶら下がっている。見た目は美味しそうな気もするが、「カラスも食わぬ烏瓜」などと言うから、食べられた代物ではないのだろう。秋の始め頃からあつた実は、ことさら赤みを増すでもなく、ただ風に揺られていた。寒い朝、実の上側に白い霜がうつつすら降りていた。まるで毛糸の帽子をかぶっているみたい。淡彩の日本画を見るようである。

戸を閉つる音の乾きや冬近し 丸山マスマ

夕方近く、日も陰ってきたので、そろそろ雨戸を閉めようかと立ち上がった。これまでには気にもしていなかったが、ガタガタ音を立てて閉めていたのが、今日はなにか滑るような感じで手応えがない。空気が乾燥してきて、あの引っ掛かる

ような感じが消えている。冬はすぐそこまで来ているのだから。風邪の季節だしうがいやマスクを忘れないようにしよう。

時雨傘とんと水切り猫の声 松本 光子

あーいやだ、雨に降られてしまった。やれやれと玄関に入る前に傘をたたみ、とんとんと水を切った。そうしたら、家の猫ちゃんが待ち構えていてニヤーと鳴いた。たったそれだけの他愛ない話なのだが、何かほんわかしていて魅力がある。三毛なのか、黒なのか、牡か牝か、作者は何も言っていないのだが、きつと可愛がっている猫なのだろう。

赤ん坊飽かず眺むる小六月 川野 妙子

穏やかな春のような日差し。公園で日光浴を楽しむ人々。中には赤ん坊をあやす新米パパの姿も混じっている。ミルクを飲ませたり、オムツを代えたりと忙しいが、子供はあつという間に大きくなってしまふ。よく言われるように、大変なようであっても、親にとって、手がかかる今が一番楽しい時である。そばで見守るお祖母ちゃんの日も思わずほころぶ。

錦秋や北斎を見てモネをみて 田中 千穂

芸術の秋。ルーヴルやオルセー、そしてニューヨーク近代

美術館……。美術ファンにとって、秋は海外の美術館からやって来た名作と出会うチャンスでいっぱいだ。それだけではなく。日本の浮世絵も「ジャポニズム」（十九世紀末のパリの日本美術ブーム）の立役者として出展されることが増えている。

作者はまず北斎の浮世絵を鑑賞し、次にモネなどのフランス印象派の名画を見てため息をつく。満足満足の日である。

松にまで燃え移らむと山紅葉 大場 順子

全山紅葉。日光の中禅寺湖や箱根の芦ノ湖に行くと、真っ赤に染まった山肌が水面に映り、息を飲むような美しさである。ちょっと離れた場所に枝ぶりの良い松が枝を広げているのだが、紅葉の炎があまりにも盛んで、燃え移りはしないかと思ってしまうほどである。

夕しぐれ沼へひろぐる墨流し 松井由紀子

日が西に傾きかけたころ、時雨が走り抜けていった。散歩の途中、里山のほとりの木の下で雨を避けていた作者は、そばにある沼の水面が、まるで墨を吐いたように黒く濁っているのを見た。沼底が雨粒に打たれ、粘土質の泥がはね上げられたためだろう。昼間の紅葉がまるで嘘のように、あたりは無彩色の空間になっていくのだ。

季音雪



御慶 網野月を

「ガス燈」と「カサブランカ」を去年今年
産声の御慶御慶と聞えけり
確率の計算嫌ひ初御空
セーラー服をそれらしく着る雪女郎
一月や川の流れの変はりしを

鳥の影 石井喜恵

鳥影の一闪静もる寒日和
袖袂振れ合ふ晴れ着初社
書初の癖の太字の風雅かな
鏡餅の罅割れにある脱力感
暮れ切らぬ空は喪の色虎落笛

地のもの 石山 かつ子

みな笑まふ

大村 節代

ぬくさうに枯れてゐるなり葦の原
女正月少しの酒に惚気出て
ちやんちやんこ雀にひたすら餌を撒いて
藁苞の中に地のもの寒厨
福寿草似すぎし母に会ひたくなし

初売りの声の飛び交ふ魚市場
春着きて写真一葉みな笑まふ
掛軸の落款薄する小正月
尺八の一音狂ふ小正月
餅花や万葉集を繙けり

飾 焚 く 大橋 廸代

初 不 動 栢尾 さく子

かき鳴らす曲はルンバよ暖炉の炎
樽明り髭面いままも母を恋ふ
胎の子と越ゆる国境去年今年
神官は色白短軀飾焚く
鰯料る断水の刻迫りをり

提灯の油紙の匂へる初不動
蠟梅の香の溜り場に荷物置く
号泣は男性名詞雪の道
寒明けを待つ幾度も眼鏡拭く
寒疾風身を庇ふときうしろ向く

一 月 菊池 ひろこ

旧き良き

五明

昇

原風景めく一月の床柱
一月の川疎開地をその上に
一月の洪き金色銀座街
初声や一對で置く石灯籠
初風や袂にDVD入れて

ふるさとや背戸の傍の囿ひ葱
人知れず焚火に焼べる文の束
もがり笛激浪砕く親不知
掘炬燵恋の予感の膝がしら
雪女郎ふはりと覗く化粧の間

正 月 小林 萬二郎

銀 巴 里

境

延 昭

若水に家長手馴れし腕捌き
輪飾や風にたゆたふ舳ひ舟
世の中は出たとこ勝負去年今年
迫り上がる大き火の玉初日出
若水に寄する余生の幾何か

近松忌太棹にはる一の糸
冬の灯や「銀巴里」跡にある慕情
紙紐で括る詩集や冬の蠅
露天湯へ渡り廊下の冬灯
屋上の出世地藏や寒旱

令和二年 椎野美代子

雪女郎 鈴木康世

初明り生家の雨戸岩戸めく
父の座のうしろの正面鏡餅
狛犬の欠けたる鼻も初景色
賀客とはガーデンチェアの白い猫
かにかくに生きて福茶の湯気まどか

道行きと洒落てみましか雪女郎
雪女郎白無垢鉄火でありしとか
読み返す「北越雪譜」雪女郎
鱒酒に酔ひて錯綜頭脳かな
葉の陰に朱を閉ぢ込めて藪柑子

令和二年 島津初花

神の水 永野史代

初空へ傘寿の一步踏み出せり
春着きて交はず言葉の仰仰し
電線からこぼれ落ちたる初雀
初句会恵比須顔して席に付く
ねんごろに茶菓を配りて初句会

抑揚のあり上州節の虎落笛
虎落笛をんなが一人泣きに来る
手編みのマフラーもて余したる夫である
月冴ゆる垂直に海射るやうに
寒の水光りて神の水となる

寒 夜 西山 貴美子

初夢の彼と何処まで歩いたやら
寒紅をこれ見よがしにひけらかす
ゴスペルの途切れとぎれに春寒し
たそがれは産土色に実万両
足首の疼きに目覚む寒夜かな

初 詣 波多野 寿子

天神様の柱華やぐ初詣
笙の音や水の流れに淑気あり
初詣娘につかまつて列の中
正月や特技それぞれ曾孫五人
これはこれはお節の海老が飛び交ひぬ

友より文 星野 和葉

寒林やトランペットの透き徹る
寒林を抜け細身になりし気分
故郷の友の文かも風花す
風花に双手広げて退院す
樂日のやう風花舞ひて旅路果つ

お 正月 茂木 和子

読初は「折々のうた」師の俳句
切り株の年輪著き淑気かな
おだやかな日のつづきけり小正月
一羽来て二羽五羽まだ来初雀
春着の袂蝶の風情に振り行けり

鰯 矢作水尾

福寿草 山中みどり

嫁がせてあとより送る祝鰯
鰯頭たたせて猛るコンロの灯
山門に一歩古刹は冬の園
冬木の芽天地をゆする鼓笛隊
蒼天にはや躍動の冬木の芽

三角に日当る庭の福寿草
黒々と土匂ひけり福寿草
器量良き鮎の甘露煮春隣
グラタンのチーズとろとろ冬銀河
鰯しやぶのやや厚切りに潮の音

雪 山中順子

寒稽古 由良ゆら女

男にはをとこの事情雪の夜
紙コップ重ねて捨つる雪催
紙で切る傷ひりひりと雪蛍
雪吊の大小揃ふ城下町
すぐそこの山の雪待つ六地藏

威儀正し黒艶やかに初鴉
齒揃ひのよくて数の子数の音
後見の若さ目で追ふ小正月
見送りの母に一礼寒稽古
待春の水辺の呼吸鳶の笛

こんにやく 吉住光弥

拍手の風切る音を恵方とす
元号四つ生きて慙悸の初山河
寒林や入るに掟のある如く
寒林を行き鬱屈の晴れし空
丸こんにやくにあそばれ北の小正月

(順送り)

☆

☆

特集

さらば!〈つき過ぎ〉
——句材の間合のはかり方

◎巻頭作品10句

佐藤郁良・白濱一羊・対馬康子
照井 翠・ながさく清江・長峰竹芳
宮田正和・和田順子

俳壇

3月号

2月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
大井恒行

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅱ期」…山本一步・田口紅子

新連載

わが俳句道・わが金言^{モット}……………加藤耕子
先人のことば……………宇多喜代子

超結社の会へようこそ……………「絵空」

連載

続・日本の樹木十二選……………広渡敬雄
俳壇史エピソード……………坂口昌弘
季語への供物……………奥坂まや

俳壇時評

…坪内稔典／俳壇月評……………長嶺千晶

俳句と随想12か月

野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

季音月

初御空

藤澤喜久

熨斗つけて拝みたきかな初御空
 句友三人いみじく米寿の年酒受く
 雪国へロマンを誘ふ旅ごころ
 余所ゆきの笑顔くづるる春着の子
 変哲も無き日彩る石路の花

四手網

鳥羽和風

猫柳四手の網と光り合ふ
 白魚や当らず行けよ喉仏
 猫柳近江の国の手漕ぎ舟
 榛の木の瘤に捕まる春の雪
 餅肌へ一滴落つる雨水かな

駅ピアノノ

丸山マズミ

駅ピアノノサントも交り音紡ぐ
 高高と風が風追ふ初御空
 名を知る川名知らぬ山の初景色
 振袖を襷に預け弓始
 弓なりの寒月天を射る勢

寒昂

田寺玲子

冬ざるる古墳の錠の新しく
 俵屋の達者な英語膝毛布
 初東風や浮灯台のゆれやまず
 人日のメリケン波止場風新た
 魂魄へ灯す青竹寒昂

雪女

森田祥絵

初御空白の艶ます鷺舞へり
 漸くに正面を向く風の意地
 どの道行くも故郷のなき雪女郎
 岐れ道人恋しさの雪女郎
 過去を知る手鏡胸に雪女郎

福よ来い 森本早苗

初詣 牙の失せたる 鬼瓦
目標は控へ目に置くお元日
二日入初有馬芸妓の湯揉み唄
銭纏ふ奉納まぐる福よ来い
町内のどんどに貰ふ汁粉かな

三日 宇田白鷺

天空はきらめく星座初まうで
妻の座に着ずじまひなる春襲
幸の字に願ひ込めたる筆始
三日はや帰り仕度の子の一家
戸祝ひや礼者となりて子供達

生一本 柚木治子

土瓶蒸しの満ち足りし味忘年会
出初式ひかうき雲の生一本
空の蒼蹴りて逆立つ梯子乗
わだかまり解けし友の初笑
風花や古里はこぶ遠汽笛

御縁 小倉倭子

初詣五円玉投げ良き御縁
枝に結ぶ凶の戒め初みくじ
オリオンの真下で反り身露天風呂
河豚雑炊連れの女房下膨れ
毒舌のますます猛けて河豚酒

探梅 十倉和子

一笛のつんざくやうな能始
竹刀背にゆくは小次郎寒稽古
寒稽古かつての泣き虫一の弟子
矍鑠と女人ひきゐて探梅行
ふところに瓜坊あそばせ山眠る

後ろ姿の 渡辺舍人

冬帽子似たれば秘むる恋ごころ
春隣る野球部員ら遠投す
待春の席は窓辺に喫茶館
大寒の刻繰り返す砂時計
不倫てふ毒を少しく猫の恋

春の使者 池田雅夫

春の使者疑ひのなき日の光
三山の欠伸の連鎖浅き春
老梅の情熱未だ紅紅と
春時雨木木しなやかな風を受け
たきつける農夫魂草萌ゆる

生一本 松本光子

初場所を祝ふ令和の触れ太鼓
屋形船ほどよき揺れや寒の風
都鳥鳴きつつ渡る橋いくつ
雪吊りの男結びも四代目
寒詣で火伏の神に生一本

冬景色 荒井俱子

二業地のなごりの町や都鳥
潮風が育ててをりぬ野水仙
野水仙叫ぶがごとき岬風
父母がゐる猫も居る家軒氷柱
茅の家に煙出しのあり軒氷柱

冬満月 加藤むら子

我が町を囲む山々淑気満つ
合流の水面に映ゆる冬満月
初雪の連山望む朝ぼらけ
言ひ分けを言ひそびれたり大噓
大寒の蒸気機関車札所行き

根深汁 井上燈女

父祖の地の高くせり上げ葱の畝
負ん気をまだまだ残し葱を採る
葱の葉へ糖度吹き出て採り頃に
根深汁膝を合はせて嫁姑
百寿なる兄へ一献年酒汲む

カルタ取り 高島寛治

百歳も一才も居て初笑
五才児が百歳氣遣ふカルタ取り
風花や心許なき宿の夜具
風花や単身赴任の荷は軽し
寒雀発つや台詞の無き舞台

戸車 町野 広子

聖夜眠らぬ新宿渋谷池袋
一つ夜具の幼き二人聖誕祭
ほの暗き湯宿の廊下もがり笛
雪中花海の匂ひの村に住む
戸車の一つ動かさず神の留守

初日記 霜中冬至

ののしりを真面に受けて菌朶驕る
この一年生くる気構へ初日記
初雀きつと来ること疑はず
味のなき数の子かじり八十路中
平成から令和元年日記果つ

明の春 井関 礼子

昭和平成生きて令和の年新た
平凡と言ふ幸せをメ飾る
半生を浪速の新春に棲み旧りぬ
七種や湯気にほどけし囃し唄
小正月平等論も常の代に

羽子板 臼井 由美

羽子板を突かす令和の棚飾る
初富士を共に拝する人遠し
駅前スマホ片手の晴着の娘
その先は海よどうする雪女
雪女郎輪廻転生せし母は

臘梅 川崎 道子

臘梅や空手胴着の生乾き
冬帽子ピアスの穴を包みけり
一段飛ばしで登る石段息白し
寒稽古終へ喉のよろこぶ缶コーヒー
冬夕焼ぼつぼつ灯るビルの窓

初景色 内田 恵子

初景色高層ビルに後光射す
胃袋のほっこり動き七日粥
脳トレと筋トレはじむ小正月
虎落笛天神様の細き道
虎落笛耳聴くなり仕舞風呂

寒 岡野 順子

白鳥の首を伸ばして待つてゐる
 大寒の笛吹き葉岳鳴り通し
 寒の戸の鍵の機嫌を確かむる
 寒の水一氣に飲みて意を通す
 肩の荷のがくりと重し雪女郎

初詣 川野 妙子

シニヤカー押して媪の初詣
 初詣和服輝く列の中
 柏手二つ願ひ山ほど初詣
 ふるさとの味遠くなる雑煮かな
 初風呂やこの幸せを如何にせむ

☆ ☆

【特集】二号連続企画

ふるさとを詠む

47都道府県を詠んだ秀句を収録

●巻頭三句

宮坂静生

稲畑廣太郎

鈴木節子

朝妻 力

中山和子

安藤喜久女

●今月の華

南うみを

細見道子

●俳句と短歌の10作競詠

大高 翔

染野 太郎

●人と作品

佐藤 文子

『火炎樹』

●その時、俳句手帳

増成 栗人

●好評連載

網中いづる

SEASONAL
 KALEIDOSCOPE

筑紫磐井

坂口昌弘

●忘れ得ぬ俳人と秀句

青木 亮人

●句の手触り、俳人の響き

大西 朋

●俳句へのまなざし

藤村 公洋

●俳句のつまみ

酒井 佐忠

●本の窓辺

二ノ宮 一雄



Haiku Shiki

2020年3月号

2月20日発売
 定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/>

東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音花

若水 梅澤 佐江

若水をふふみて五感研ぎ澄ます
 松籟や一月の富士こそ秀麗
 色褪せし情の文や寒椿
 侘助やひそやかに猫通ひ逢ふ
 五分咲きのままに乾びて冬の薔薇

初景色 井上 玲子

岩礁に孤高の海鷗初景色
 みはるかす秩父嶺凜と初景色
 屠蘇祝ふ稚の笑み添へ四世代
 氏神の道を春着の裾捌き
 乙女等のはつしはつしと初太鼓

成人の日 野口 和子

父泣かす成人の日のうなじかな
 どんぶりのおつきりこみに雪催
 新しき五年日記の 一頁
 初場所や晴着艶めく砂かぶり
 神棚に 供へ 柏手 初商

父の冬 松井 由紀子

冬ぬくし診療室の招き猫
 しまりなき冬を苛立ち無駄遣
 探梅行蓄めでたく見定めり
 短めの寝衣より脛父の冬
 刻違へず雨戸軋らす父の冬

一月 井口 俊晴

一月や海賊船は錨あげ
 轟きて一月の波砕け散る
 小正月どつかと座る山の神
 寒林を眼下に眺め鳥の群
 街道の佛に捧ぐ水仙花

雪女 大場 順子

鰯捌く玄界灘の色のまま
くれなゐの紐を唾へて雪女
平家谷にかかる眉月雪女
年玉に蒔絵の文箱貫ひけり
声たてて乳齒二本の初笑

若井 山田 美佐尾

弓始きりりと結ぶ長い髪
ブロンドの少女を照らす冬燈
寒燈のぼつんと一つ駐車場
冬ばらを娘と思ひ目をかける
暁闇の一葉想ふ若井かな

冬の燈 森川 義子

すぐそこに初島見ゆる探梅行
探梅や婦系図のゆかりの地
栄転の胸に華やぐ冬薔薇
百咲きて百の明るさ冬薔薇
冬の燈や轆轤の土の立ち上がる

初山河 松宮 保人

娘子の和服ひらりと初詣
初雀逃がさぬやうに静肅に
妻と居て半世紀なり初山河
強かに鎮守の供物を初鴉
日輪の静かに入りし三日かな

煮凝 野平 美紗子

煮凝や眼玉所望の輩ゐて
豆入りの寒餅旨し疎開の地
眉月と金星引き合ふ寒夕焼
山姥の話に和む炬燵かな
逝きし人偲ぶよすがやひめつばき

冬芽 矢島 清

明日葉の冬芽の伸びる屋敷畑
初旅や雨のでこぼこ城ヶ島
野水仙岬は風の通過点
マスクして下町ひそとたづねけり
大寒の日ざし帽子に詰めにけり

齋 粥

菅原知子

ぼこぼこと帯浮き沈み柚子湯かな
初御空真一文字の雲の浮く
高台で初富士拌みコンピニへ
初糶の袋の中で動く五指
齋粥真上から吹き凹ませる

杞憂癡

福田千春

本殿に辿りつけずの初詣
初詣階の先なる空まさを
「詩はあるか」と記す一月の句帳
こはごはと乗る一月の体重計
月冴ゆる又も眠れぬ杞憂癡

初日の出

上戸千津子

待つ人を朱に染めなして初日の出
年代の傾ぐ神木注連飾
山道の白木の鳥居初日影
古里の具雑煮恋し飛魚の出し
福笹の心地よき音小判跳ね

嫁が君

宮崎雅訓

盗み食ひ味見と称し嫁が君
双六や六つ進むも振出しへ
主の座膝に孫あり雑煮食む
初夢や富士をぺろりと食べ尽くし
五年振り一家揃へり福寿草

執念

原田想子

行き合うてほほえみ交はすマスクかな
納豆の糸の執念もてあまし
初場所の「炎鵬」地を這ふ天を向く
重ね着の脱ぐを手伝ふ診察医
旅一日休養三日日脚伸ぶ

初詣

西浦千枝子

紀州富士大きく見ゆるお元日
拝む事手を添へ教ゆ初詣
真つ平な南紀の海へ冬落暉
寒稽古墨すつて終ふ幼き手
兄弟商才ほめ合ひ屠蘇祝ふ

寒 月

松山清子

初旅は鈍行がよし紀州富士
鳩死すと子ら騒ぎある寒の入り
寒月や街の真中の天守閣
取り毀せし婚家の跡地寒の月
寒月や背筋をぴんと張りて生く

冬 帽子

秋山冷子

北に発つざつくり編んで冬帽子
素つぴんの山眠らせて水鏡
父の背は城の石垣冬木の芽
同期のさくら卒寿越えたり冬うらら
冬銀河今宵賢治と旅に出る

初 詣

中野

彊

初旅や海を眺むる湯の宿に
石段の高きを登り初詣
賽銭を投げて音良し初詣
梅園よ高き低きに咲き競ふ
大道芸逆立ち拍手冬ぬくし

松 飾り

後藤綾子

松飾り令和の街の定まれり
青竹の切口匂ふ松飾り
ラウンジで御慶をかはず異邦人
今年又神に頼りて破魔矢受く
大仏の螺髪が光る寒落暉

☆

☆

現代俳句鑑賞

網野月を

秋の風親のごとくに石に吹く

宇多喜代子

〔俳句四季〕 1月号・冬帽子より

作者は昨秋、文化功労者に選ばれた。現在最高の俳人である。その作者の目から見ると「秋の風」は中七の「親のごとく」に感じられるのである。石に親はいないのであるから、「親」は作者の親であろう。と読み進めれば、「石」に作者ご自身を重ねておられることになる。この謙讓表現は、常に作者ご自身の真中に有るもののように思う。他に「ここまでを無病に生きて冬帽子」「冬帽もいのちも大事手袋も」「いつまでもこの世や冬帽子のへこみ」がある。

強がりはよせよ！ 唄うは寒いピアノ

大井 恒行

〔俳句四季〕 1月号・南花北雪より

「寒い」といいながら、上半分の「強がりはよせよ！」に仄かな温かみを感じずにはいられない。定型のリズムをここまでスタスタにしながら、定型の崖つぶちでつま先立ちしているような掲句のリズム感に、筆者は父性のぶっくら棒な愛を感じてしまうのだ。俳句表現の可能性の地平線を何時も見据えている作者の作句態度に敬服している。

裏山に入りてゆくも初吟行

茨木 和生

〔俳句〕 1月号・初湯殿より

今春に第十五句集を出されると添えられたエッセイにあつた。作者の師の十七冊を見据えているのだと宣言されていた。掲句は力みの無い句意であり、その句意を表現するのに最適な形をしている。誰もがすんなりと理解する句でありながら、心の中に残る句なのである。

よく枯れてかがやく空となりにけり

恩田侑布子

〔俳句〕 1月号・神橋より

樹の枝が「よく枯れて」、「空」が「かがやく」ばかりに見えた。ということだろう。が枯木と空の様子の因果関係を感じさせない作りになっている。「枯れ」たのは「空」なのかしらと思ってしまう程だ。深読みが出来て、読み手に自由を与えてくれる句である。つまり座五の「なりにけり」の丁寧な言い方が十分な余韻を作り出しているからである。作為からのフレーズではなくて、自然に紡ぎだされるフレーズなのである。

山懐に古る開港凶鷹の天

高尾 真琴

〔俳句界〕 1月号・雪の柚より

「開港図」というと筆者は幕末のそれを想像してしまおうのだが、「開港図」とのみ記されているのだから何時代のものなのかは分からない。「山懐」と「開港図」の取合せの機知のように読んでは詰まらないだろう。日本という国は「山懐」に在っても海へ思いを馳せるものなのだ、と読みたい。座五の季語「鷹の天」の幹旋が圧巻である。もしかしたらこの「開港図」は鳥瞰図かも知れない。

春雪やさつらふ文を読むごとく

（俳句界）1月号・春隣より

佐久間慧子

上五の季語「春雪」に対して、中七座五の句意を直喩表現にして取合せている。衝撃というような緊張感を意図しているのではない。質感を揃えて「春雪」の本質を捉えているのだ。俳句の本来の型を遺憾なく使いこなしている。「さうらふ文」という回顧的なものを詠み込みながらもその取合せに新味があり、「春雪」の季語が生きている。

へうたんの遠くへ行きたくて揺るる

（俳壇）1月号・眩き日より

尾崎 淳子

作者の世界観が十分に表現されている。作者の創作の世界が其処には厳然と存在していて、作者の視線から見た景というよりも、（喻えが飛躍し過ぎるかも知れないが）弱者に作者が憑依して、そこから見ている視界を叙していると読むことが出来る。

秋の蝶風のかげらとなりて飛ぶ

（俳壇）1月号・スキップの少女より

柏木はる子

中七の「風のかげらと」の把握が作者の個性の表出なのである。「飛ぶ」と丁寧な言い終えたところに「秋の蝶」の主體性も垣間見えて、客観表現との融合が上手く働いている。

花冷やビオラにf字孔ふたつ 風船の溜りをるなり空の涯

（句集『空の涯』より）

宮田 應孝

作者はビオラを弾いておられる方なのである。ヴァイオリンやチェロでは「花冷」は無いのだろう。ビオラは冷える楽器なのである。f孔と言いながら、表面に左右対称にあけられているから片側はfの線対称図形になっている。「ふたつ」と把握したところで句が成立している。次句は、少年っぽい句意になっている。ファンタジーである。そう思つて作者の風貌を思い浮かべると「星の王子様」のような雰囲気をもっている。中七の「……をるなり」の丁寧な措辞が句に風格を与えている。

手を拡げ抱く荒川風青し 風を招ぶ一輪草の根のちから

（句集『銀葦』より）

山崎 十生

作者は川口市在住であるから、荒川なのである。中七の後には切れがあつて、座五の季語の提示という構図である。もしかしたらパーセントくらい、上五の後に切れて、「荒川風」と読んでみたいような気もする。次句の「根のちから」には参つてしまった。俳句的表現でもあり、俳句的把握でもある。作者の眼が、作者の言語世界が俳句であることの証である。

山本鬼之介 選



借景のもみぢ燃え立つ秋子の碑
母と子の絆は強しかぶら汁
虎落笛父の右手は戦場に
虎落笛肌の触れ合ふ人の居て
空白の日のいとほしく古日記

若狭 飛永 鼓

頼りなき日日の記憶や日記買ふ
転職への秘めたる思ひ牡蠣の殻
枯園やおとぎ噺の蜜と毒
冬の雷阿修羅の如く山の神
初霜や心の解けていくやうな

さいたま 青木 鶴城

潮風にたたかれ凜と石路の花
聖夜かな胎児はなべてさかさまに
ガラス越し聖夜の歌のこぼれくる
山茶花よ咲くも良しなほ散るも良し
癒え難きものを抱へて年の暮

鴻巣 大塚 茂子

吊し柿絵画のやうな茅の家
晩秋の日高の大地名馬帰す
狛犬がお手をしさうな秋祭
群青の海になだるる野水仙
富士見坂不二の高嶺の雪燦燦

さいたま 保坂 翔太

凧や一の鳥居の注連ほつる
凧や大道芸の囀るる声
置きざりの松毬一つ冬の椅子
秩父嶺のあくまで蒼き小春かな
水影に倦んで微睡む浮寝鳥

曲淵 徹雄

「鯛焼は粒餡が好き」母百寿
枯葦や入り日に赤き母の顔
荒川を渡る終電月冴ゆる
絨毯の巻き癖取れぬ新居かな
目を閉ちて何を思ふか炬燵猫

日高 徹

赤い服は着ない約束ポインセチア
到来の牡蠣に俄の牡蠣割女
牡蠣割女生臭きまま参観日
わたくしに刺さる彼の声霜の声
しののめに恋尽くしてや浮寝鳥

横浜 正木 萬蝶

初雪や文士の顔で墨を磨る
窓ごしの初雪ながめ恋いづこ
特産の檸檬添へられ牡蠣届く
土手造り秘伝有る無し牡蠣の鍋
鰯かまを塩焼にして男飯

草加 河野はるみ

短日の時を指をり鳩時計
腕白が猫を引き出す掘炬燵
渡し待つ草履と雪駄枯柳
藁葺に陶の表札柿落葉
デュエットは「大阪しぐれ」近松忌

行田 近藤 徹平

田舎家の垣に芳しお茶の花
小春日の墓前に集ふ家族かな
喧騒の街の灯遠く冬の月
寒月のエールに応へ明日を待つ
待ち人や冬夕焼の消えゆけり

さいたま 宮崎チアキ

母逝きて抛り所なき年の暮
惜別を十七音に年暮るる
夜更しの足の裏より湯ざめせり
ともしびを持ちて入場聖夜劇
シャンパンの泡のぼりつく聖夜かな

熊谷 越田 栄子

短日や齡を数へるころの指
書道展出で凧の色に会ふ
凧の晒す小径の土固し
凧や傾く道標傾ぎ読む
齡重ね無欲もたのしクリスマス

熊谷 神田 治江

夢叶ふ日を数へつつ冬木の芽
湯豆腐の湯気のため息溶けてゆき
湯けむりに迎へられたる冬帽子
ビル風にころがり行くや冬帽子
父よりの太字の葉書冬ぬくし

川口 野田 静香

幕間の座席を守る冬帽子
骨董市を冷やかして行く冬帽子
年末賞与古女房の腕まくり
湯豆腐や有馬記念の三連単
ふる里の熱き歓迎虎落笛

さいたま 渋谷さいち

払眺の薄氷にさて手を触れむ
煮ばうたうの葱香しや道の駅
寒天や踝疼く風の音
片手袋踏みしだかるる駅階段
冬夕焼友と別るる峠茶屋

さいたま 加藤でん治

冬ざれや蔵の漆喰剥がれ落ち
聖堂の鐘の音響く冬田徑
外套の中より臨く猫の顔
年の市おぼけ屋敷の賑やかさ
流星群の師走の空や救急車

さいたま 田中 章嘉

キャンドルの火影幽かに聖夜果つ
すは湯ざめ濃い目紅茶にブランドー
意のままに巻けぬカーラー湯ざめせし
アーメンの丸き口許聖歌隊
餅の音絶えて久しき露地の奥

高崎 原田 秀子

凧の吹き残したる夕日かな
蓮枯るる音聞こえさう城の堀
枯蓮田まるで満身創痕かな
断層の走る山道寒椿
本音かと寄り添ふ初老おでん酒

上尾 横山 君夫

人にそれぞれ背負ふものあり冬の月
喪婦りの靴音重く冬の月
湧き水のやうな広がり大葉牡丹
サッカーボール蹴り合ふ親子冬日和
落ちてなほ笑みほつこりと寒椿

さいたま 熊倉千重子

渡良瀬の溪谷鉄道秋深む
紅葉狩小雨で濟みさう晴れ女
初霜の光り輝く造成地
初霜が下りましたねとごあいさつ
暮早し着いたばかりの永平寺

東京 太田 絹映

笑顔の遺影兄の遺せし冬帽子
焼き葱や喉にじんわり匂ひけり
契約を済ませ冬帽キャンプイン
湯豆腐やことは優しき南禅寺
行く年や五年日記も書き終へて

新 曆文

玉子酒日課は一日一万歩
おでん屋の主は昔商社マン
茜空焼芋の声遠くより
焼芋を割つて差し出す仲直り
命ある限りは生きよ冬の蠅

さいたま 染谷 正信

日向ほこ振り込め詐欺の話など
河豚の皮まで有り難くいただきぬ
河豚食うて人生いかに閉つべきか
すき焼やそろそろ餛飩入れますか
ことごとく裏目に出る日おでん酒

東京 石川 理恵

本棚の整理朝から漱石忌
積年の憂ひ丸ごと厄落とす
団欒や競技のごとく蜜柑剥く
整然と聖樹の並ぶ丸の内
振り返る令和元年古曆

平塚 丸屋 詠子

秩父夜祭山へ染みゆく笛太鼓
優勝の謝意を告げあふ冬日和
冬枯や太古の闇の瀬音かな
旅仕度心せかせる冬帽子
冬めくや長き影追ふ子らの声

さいたま 秋本カズ子

刈込みの音快き冬夕焼
山裾に消えゆく列車冬夕焼
張り終へし障子に映ゆる冬夕焼
小さき手に握る賽銭七五三
掌にのらぬ風花惜しみけり

さいたま 秋山 紅花

寒昂十九で逝きし姉を恋ふ
列風に零れ落ちそな冬の星
遠吠えで犬が知らせる焼諸屋
電線に一羽の鴉雪催
粗朶をたく越後の里の雪催

笹本 啓子

奥宮の焚火にしばし手をかざす
山門の朱を濃くしたる冬夕焼
月冴えて長き握手の別れかな
玉砂利に軽トラ止めて年用意
急ぎ来る江戸袂の人石路の花

橋本 京子

背を越えし出水に耐へて冬菜畑
姉さん被りして母徳ぶ年用意
吹き荒ぶ風に凜たる冬木かな
鷺神社幸をかつこむ西の市
庭園の礎明し石路の花

西幅 公子

緞通の重々しさや義父の部屋
緞通の古びし色や京町家
北国の凍空載せて終着駅
手をかざし暖をとる夜や初時雨
歳晩や静かなる夜に手記を読む

山口 韶子

短日や笑顔見たしと踏むミシン
湯を注ぐだけの味噌汁冬の朝
障子開く被災の庭も色戻り
白鳥のスタートダッシュとはゆかず
徘徊る「ねむの木」の庭」冬薔薇

さいたま 斎藤 みよ

大振りの生牡蠣するり喉仏
軍手はめ海女小屋の牡蠣食べ放題
落葉踏みフランスパンとスニーカー
ほろ酔ひの夫ふところにポインセチア
告白の少年ポインセチア抱く

東京 石田 慶子

吾に似て力溜めゐる冬芒

杉戸 佐々木史女

おでん煮え無口無口の人となり
若き日の話に夢中根深汁

さいたま 水野 興二

銀波ひとしほ利根の河原の枯薄
十年前の残り毛糸を冬帽子
重たからむや皇后さまの冬帽子
きつぱりと要らぬ物捨て十二月

羅漢像五百瞳に小鳥来る
山茶花に夕陽あまねく散歩道
草むらの土の匂ひや木の葉散る

米寿まで女医を貫き寒椿

さいたま 松田 朋子

茶の花やもう使はれぬポンプ井戸
料亭の盛り塩たつぷり初時雨

田中 泰子

寒椿言葉少なき朝市女
良寛のさびしき庵寒椿

冬の星更地となりし生家あと
辛せを自問自答し寒卵

大げやきに抱きつく園児冬日向
生け垣の小さき抜け穴冬日射す

旅籠屋の朽ちし格子戸初時雨

冬椿咲きて主の姿なく

栃木 佐々木典子

夫嫌ふ今朝の味噌汁蕪の味
赤蕪の漬物買った飛驒の旅

若狭 山崎 郁子

寒椿触れし媼になに伝ふ
おでんの日妻も爛酒楽しめり

道草を食はず帰るや日短か
人気なき駅前通り冬の雨

枯蓮折れ池に写りし雲を突く

寒菊や慶びの日の総絞り

鳥獸と競ひてみかん摘み初むる
見下ろせば雪山光る能登と佐渡
雪のホテルロビーA1のおもてなし
瀬戸の海見下ろす鬼ノ城枯紅葉
北の町吹雪きて日暮なほ早し

愛媛 向井 章子

月冴えて姿勢正しき葱の畝
冬めきて残る一葉の風にゆれ
スッピンの顔を隠して冬帽子
赤のまま庭隅に咲き帰り花
葱さざむ音に目覚むる厨朝

さいたま 塩野 久子

雲一つ無き青空を鷹の舞ふ
仏壇に無事を祈りぬ冬の旅
団欒の真ん中にある蜜柑かな
窓窓に点る明かりや日短
日短ころ急かるる家路かな

さいたま 高原 和子

拭き立ての窓に頬寄せ寒昂
ビル街をいつもどほりに焼諸屋
寒木に花咲くごとく刺す果実
骨鳴らしるるや夜更けの寒木よ
大伯父の賀状に満つる威厳かな

梅澤 輝翠

庭隅の冬芽の目玉天を向く
狭庭にも冬芽揃うて十万国
冬の庭一人グルメのオムライス
雑草も化粧落しぬ冬の庭
教皇の声広島の枯園を

藤岡真知子

石段のごと削られし山眠る
壊さるる古き洋館山眠る
花配り笑顔あふるる冬の道
品を替へ配置替へしてクリスマス
夫作る大胆おでん溢れをり

山戸 美子

帰り花山には山の掟あり
冬めきて暗夜を飾る星達よ
半襟の色目濃くなり冬めくや
冬帽は「小津」の世界よ鎌倉を
白葱の「深谷」にかぎる太さかな

新井 孝磨

寒の入大棧橋が船を待つ
オーボエとワインに酔ひて寒昂
凍星や瀬戸大橋を渡る旅
出窓より冬の日届く母の部屋
冬木道港の見ゆる異人館

竹澤 和子

冬夕焼子供を帰す四時の鐘
庭の木の剪定終へて冬夕焼
冬ゆやけ小樽運河を赤あかと
鴨散歩人間様を通せんぼ
将棋さすあの手この手や年の暮

さいたま 千坂 平通

紅葉に大嘗宮の雅かな
冬木ぬき縁に陽射しや猫丸く
引越しをして年末の気軽さよ
親世代子世代のため年用意
寒昴感謝感謝に輝やけり

さいたま 小川 洋子

カーナビの指示遠回り冬茜
冬ざれや水辺に遠き捨て小舟
屋敷林山と呼ぶ地や笹子鳴く
冬紅葉長なが宿のお品書
枯木立忘る勿れと忠魂碑

いすみ 平石 睦子

天窓のある暮し好き冬の星
数ふれば瞬き増ゆる冬の星
冬星やニコライ堂の塔の先
数へ日や豆煮る香り満ちきたる
数へ日の予定どほりに美容院

森 和子

計画は計画のまま師走かな
湯豆腐やふはふはふはと独りの餽
一枚の喪中ハガキや枇杷の花
湯豆腐や生き難き吾をあたためて
極月や途中でとまる砂時計

さいたま 高橋 敏子

マスクしてホームに並ぶスマホ族
駅蕎麦の葱の匂ひに引き込まれ
秩父嶺や茶の花垣は風の道
眉太き白寿に余力葱きざむ
数へ日の日数かぞへて宝くじ

下川 光子

里山の粧ひ急に今朝の晴れ
冬紅葉丘に新たな白聖館
年の暮根無し暮しに契約書
歳晩の満月急ぐビルの街
山褰の白の目に沁む雪の晴れ

横浜 山岸 弘子

雨月夜句帳の余白多かりき
団栗に肩を優しく叩かるる
芋煮から始まる郷里の同窓会
冬の鴈名残の声は衰へず
老の秋心の糧となる句会

川村 治

マスクして薄墨で書く忌の知らせ
氣位を棄て切つて散る冬のばら
忘年会果てて余酔を持ち歩く
しやんしやんと手締めの音や酉の市
庭師来て師走の風を置いていく

さいたま 伊藤 愛子

大虎の零時の帰還かまいたち
不意打の「HELP」の出だし黒マント
年忘れ上司に掛ける蝦固め
卵酒アラビア文字のやうなメモ
ポインセチア告白の日の斑入りかな

さいたま 大槻 瑤蘭

寒暁や富士はほんのり紅さして
冬の朝木立きりりと並びをり
空蒼く白鳥たゆたふ湖静寂
冬の朝氣根あらはに落羽松
湖畔宿「白鳥飛来」の葉書来る

白田 みち

営業の実績表や冬の蠅
決壊の堤に残る冬柳
柔らかく笑みの返りし冬日和
浄瑠璃も歌舞伎も知らで風揚ぐる
風花が乱れて飛んで近松忌

飯田 忠男

山茶花の咲き乱れ且つ散り乱る
店先の根深葱ツイギーの脚
日向ほこいつしか恋の夢の中
オートバイ革手袋は黒光り
出稼ぎのおでんつついて妻偲ぶ

反町 修

冬夕焼に届きさうなるビルの群
捨つる物日々が増えゆく年用意
風荒び山路の落葉大移動
すぐばれる内緒話や白障子
凍て極むがちやりと落つるブレーカー

横浜 川島 典虎

忘年会ジビエ料理に華が咲く
夕ピオカを探し求めて年の暮
小春日を背に翁野菜収穫す
年の暮無駄口いはぬ淑女かな
食べたき物食べて満足年の暮

和歌山 南條きわゑ

半眼は仏の境地日向ほこ
日向ほこ額に膝に陽を集め
浮遊する魂の止まらぬ日向ほこ
充電も放電もなく日向ほこ
日向ほこ一人二人と去り独り

東京 水落 守伊

年の瀬や小走りの音響かせて

さいたま 福田 育子

冬空へ僧兵火繩銃を撃つ

和歌山 高橋満耶子

数へ日の落日を追ひ桃源郷

はふはふと舌を転がせ大根焚

ハイウエーは夢の国なり冬の月

自転車を忘れて帰宅花八ツ手

笑トレを学ぶ仲間の忘年会

「命」の字がやはり一位に年暮るる

湯豆腐や卓袱台の傷なつかしき

「ワンチーム」の納めの句会冬麗

木枯や美しき葉を散らすまじ

東京 鈴木 和子

祈する薪割る音や冬仕度

東京 河原 叔子

凧や社を守る大木よ

車輪梅時季外れ恋し忘れ花

湯冷めせり北斗七星観つづけて

一碗の雑炊に今昔の感

クリスマスソング流るる飾り窓

夫と居て蜜柑の筋を取りつつ話す

人類に寿命ありしや年の暮

憧れは無欲に変わり歳末セール

手を振りて祝賀御列冬木道

小浜 松島 寛久

かくれ里変はらぬ静けさ十二月

草加 外村 紀子

夫婦の話題に猫のくさめかな

九十歳帽子とマフラー編みし母

鋸の木挽の太腕大冬木

凧を背に電車待つ無人駅

恋敵貴様も喜寿や冬木宿

数へ日や旅立つ姿の芭蕉像

老いばれの地蔵のくさめに藁の蓑

野仏に手編みの帽子小春かな

晩秋や築百年のなまこ壁

蕨 細井 良子

水中に赤き疵あと浮寝鳥

吉川 杉浦 理恵

湯気立つる鉄瓶煤け自在鉤

牡蠣の山殻と知らずか鷗群る

熱爛や黒子気になる酌上手

焼牡蠣や松島の景煙らせむ

濁り酒おかみ手作り切りたんぱ

溜息で初雪溶かす別れかな

秋田弁飛び交ふ朝市茸買ふ

初雪や街灯切り取る闇に降る

選り取りの寒菊を買ふ朝の市
触るる葉に残る香りや霜の菊
馬頭琴の音軋しめくや虎落笛
投句日の締切記す古日記
長病を越えし眼差し初御空

若狭 岡本 祥子

七曜の寒暖はげし今朝の霜
冬蟻螂カーテン摺み動かさる
塵芥場鴉ほじくる十二月
倒影の湖面あやなす山紅葉
夕陽うけ生絹すじのひかり冬桜

さいたま 櫻井よし江

友禅の凶案華やか年用意
長崎の夜景広がり寒昂
風に乗り焼諸屋台売りの声
湖に映るや富士と冬木立
空広き尾瀬の沼地や冬木道

さいたま 野村 美子

石路の花雨の横山大観邸
匂ひ立つ旧き屋敷の石路の花
線路沿ひ走る村バス冬桜
汽笛響く山の手今宵降誕祭
五日市憲法訪ね秋の旅

埼玉 関谷多美子

空の青極みて楓紅葉散る
街の音吸ひて音なく散る銀杏
師の句載りし曆を掛くる事始
独り言増えてひとり年用意
猫パンチの一撃受けし年の暮
紅葉狩鬼女にもなれず戻りたり
読み取れぬ軸の漢詩や石路の花
シスターも整形通ひ神の留守
今知りぬ山羊の好物団栗と
木枯に踏張るトマトは翡翠色

和歌山 宮井美恵子

霜柱捨てたくない物捨てに来て
霜柱カーテンコールは総立ちで
群れ咲くも思ひそれぞれ水仙花
マフラーに顔を隠して逢ひに来し

町田 瀬戸雄二郎

藤沢 小島喜代子

初霜を踏み荒らしゆく通学路
倍速に過ごす毎日十二月
去年より小さく見ゆる聖樹かな
老犬のごとき咳して目覚むる子

東京 中尾 陽子

退院の日まで十日や小春空

冬ざるる空のベンチと紙コップ

さりげなく告げるいとまや兎の眼
日めくりの告げる師走や爪を切る

空をさく鋭き気合ひ寒稽古

鉛雲牡蠣田はいよよ静まれり

冬の蝶雨戸の開かぬ庭に飛ぶ
母逝きて曇の空に冬の蝶

ベンチャーズ聴きてひとりのおでん酒

丸き背ならぶ屋台のおでん酒

冬晴やこども歌舞伎の抜くる声
鎮魂のヴィオロン十二月の空へ

意を決しスマホに変へる年の暮

ほろ酔ひてこぐ自転車や冬の雨

パン投げて鯉を集める冬の川
風花や足踏みしつつぶバスを待つ

空映す湖面を滑り冬の鳥

黒椀にぬるりと滑り柚子の種
シクラメン店先占めてラブソング

冬の蜂ムサシと呼んで見送れり

若狭 檜鼻ことは

さいたま 湯浅 和

川崎 鈴木 玲子

和歌山 葛城千世子

大阪 飯塚智恵子

冬日向窓ガラスふく手のはやさ

白き富士冬夕焼に飲みこまれ

木枯の弾くはフォルテや我起こす
一枚の障子貼るにも大さわざ

冬の蝶日向の吾の前をゆく

凍蝶やドアにへばりて命乞ひ

生牡蠣や初体験の舌鼓
ランチ飯日頃我慢のかきフライ

上州の風にゆれある葱畑

梅林の剪定の音ひびく村

老犬とゆつくり進む霜の道
聞こえくる父のふる里冬火花

小児病棟に夢を担ぎて来るサンタ

氣持よく裸となりし大銀杏

穏やかなひと日であれと落葉掃く
デパ地下の人混み分けて節用意

冬の星黒い空から湧き出づる

冬の星愛しき人の星さがす

数へ日の五指ともなれば断念す
冬の星ひしめきあひて第九かな

さいたま 小駒さち子

武田 重子

鬼石 加藤ナヲ子

和歌山 嶋田 洋子

さいたま 長井喜代子

風の音山茶花はらり散り急ぐ
冬の夜や大勢でこそ鍋料理
日射し来てをしどりの水脈きらめけり
雨のあとけやき落葉の色増せり

東京 柳父 はる

木枯しや手の冷たきは優しき人
ポインセチアしがらみ多き吾が暮し
額縁は白き窓枠ポインセチア
蜜柑積むゲームのやうに一つづつ

東京 畑宮 栄子

煤逃の無愛想なる漢かな
寒月の輝き狐の嫁入りか
諍ひて一人きりの冬至粥
風分けし大根のれんに夕日かな

さいたま 山下ユリ子

寒椿一枝添へたるかまど竈神
鳥寄せて寒椿また生きんとす
閑や馴染みし味の店仕舞ひ
ふつつつと人の恋しきおでん鍋

春日部 諏訪サヨ子

大熊手掲げる男誇らしげ
飛び交ふや粋な手締めの酉の市
反るほどに光集めて石路の花
幸せを綴りおきたし日記買ふ

菅原 真理

響きあふ笑顔の手締めの酉の市
背丈程の熊手をかつきご満悦
花石路の囿ふベンチの二人連れ
御苑いま逆さ紅葉に人溢れ

さいたま 森下美智枝

加賀会席ゆるりと進み湯ざめせり
湯ざめして字幕に頼る最終話
湯ざめして丸谷の湯呑み両の手で
木枯や架け替へられし橋渡る

東京 飯室 夏江

枯蓮活けて花展の華となる
枯蓮ばかり残りて風の道
冬ざれやサイレンの音喧し
冬ざるる鳥影遠き海の果

春日部 仲田 利子

小春の祖母巢鴨へ地藏詣でかな
寒椿落ちて地に咲く仏てふ
木枯や湖尻に帽子二個三個
駅前や終電待つ間のおでん酒

さいたま 安倍 弘夫

はなれゆく恋のなきがら花筏
モノナリザを真似てほほえむ涅槃西風
麗かやだれもがいつか風になる
霞より見えなくなりて頭脳線

所沢 関根 千恵

西の市顔赤らめし人の垣

越谷 阿部 幸代

昔日の農家は何処石路の花
主無き荒れ庭守る石路の花

小春日や二人がかりの犬の風呂
初氷ペロリと長き犬の舌
とどけらる小さきピンクのポインセチア

鬼石 榊原 聰子

空つ風母幾たびも雑巾がけ

鬼の子がすがる小枝でぬれにけり
小春日和のバンドネオンに魅せられて
つむぎ縫ふ針目の進む冬の星

さいたま 田中 タイ

空つ風落ち葉は小径走り抜け
好日や陽に染まりたるつるし柿

さいたま 木村るみ子

白山の巡礼道の雪女郎

隧道を抜けて翠微や道をしへ
並べ見し抱腹絶倒福笑ひ
数有るも手慣れし筆や谷崎忌

小川 藤間 友二

初雪や奥行長き家の暗さ

岡田 宣子

一鉢のポインセチアと過ごしけり
境内が銀杏落葉に染まりけり

丸皿を四角く洗ふ年の暮
セロハン紙揉まれ皺くちや風邪の声
寸足らぬサンタクロースに化けしひと

大阪 遠藤 人美

説明書理解半ばで湯ざめかな
木枯の音を聞きつつ酒を酌む

緒方みき子

小春ちゃんお稚児姿の小六月
富士仰ぐ駿河の湾の小春風
初めての薔薇の花東定年日

三郷 沼尾 岳

凧にかさこそ踊る木の葉かな

佐藤 克之

秋の声つき抜けてくる神の杜
秋色の一点鳶の輪を描き

木の葉髪鏡の中に母偲ぶ
小春日やミニ二機関車はバス通り
冬ばらの思ひ通りに開けず

さいたま 綿貫ひさの

枯蟪蛄鎌を振り上げ威のポーズ

鈴木 藻好

玄冬や今年の漢字「令」を書く
牡蠣雑炊宮城の海と友の顔

鈴木 藻好

極上のフランスワイン牡蠣啜る

数へ日やおひねり飛んで縁起もの
リビングのガラス戸映ゆる冬の星
数へ日にあめや横町人の群

落合 和枝

水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題

「春の風」(はるのかぜ)

「蜂」(はち)

「遊」詠込み

(注1) 例句 春の雲遊びをせんと生れけむ

てふてふや遊びをせむとて吾が生れぬ

島 青櫻
大石 悦子

(注2) ○野遊び・山遊び、船遊び、等季語は不可。

句数

通じて二句。(一組)

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料

一組につき千円。

締切

五月九日(発行所必着)

※投句用紙(水明三月号・四月号に添付)使用のこと。コピーも可。

作品評

山本 鬼之介

虎落笛父の右手は戦場に 飛永 鼓

数回読んでも解釈の難しい俳句であるが、この句が放つているオーラに吸い寄せられて巻頭を選んだ。先ず、この俳句が実即ち作者の父の身にあつたことを詠んだものか、それとも、虚即ち創作によるものかを考えてみたが、どちらであるという明快な判断が下せなかつた。

前者とすれば、作者が幼少の頃、実父が外地の戦場で、敵軍の銃弾を受けて右手を失つたということになるだろう。そうだとすれば、傷病兵として復員され、亡くなるまで不自由な生活をされてきたのだと思う。後者とすれば、作者が見聞したり、小説やテレビなどから吸収したものを題材にしたこととなるだろう。何れにしても、季語の「虎落笛」が本句の発想の引き金になっていると言えよう。

竹垣・柵・電線などに、冬の激しい風が吹きつけて、鋭い笛のような音を発する虎落笛は、冬の風を表現する幾つかの季語の中で、最も人間的な要素を内在していると思う。農作業をしていた作者が虎落笛を耳にして、往時の酷寒の戦場に

思いを馳せ、今もなお現地の何処かに眠っている父の右腕に、追悼の意を表しているのである。

枯園やおとぎ噺の蜜と毒 青木 鶴城

御伽噺というと、日本昔話で代表的な「桃太郎」「浦島太郎」「かちかち山」などをすぐ思い浮かべるが、一方では、西洋のアンデルセンやグリムの童話のイメージも伝わってくる。それは、「蜜と毒」という言葉が発信する「善と悪」、さらに思考を進めるならば、話に登場する「善人と悪人」にまで進展する。「舌切雀」の爺と婆、「白雪姫」の王女と継母など、他にもいろいろある。

枯園という独特の雰囲気を持つ空間が、作者の心に何時にないロマンを注入したのだろうと解釈したが、御伽噺の字義には、「非現実的な話」「夢物語」もあるもので、これは男女間に介在する夢物語であり、甘い誘いの裏には恐ろしい落とし穴があるという教訓にも通じる俳句でもあるか。くわばらくわばら。

聖夜かな胎児はなべてさかさまに 大塚 茂子

聖夜（クリスマス）の傍題）に対していささか異色な題材であるが、無事に出産するまでの妊婦の心労や身体的な苦労を改めて認識する俳句である。「なべてさかさまに」は、胎児の頭が下になっている正常位のことであると解したが、胎内で

骨盤位いわゆる逆子になると、臨月までにいろいろと心配事が多く、正常分娩に向けての対策が必要になると聞いている。本句は、聖母マリアからの発想かと思うが、我が国にとつての重要課題である少子化対策にも繋がるような気がする。

群青の海になだる野水仙 保坂 翔太

「群青の海」とは、「群青のような鮮麗な藍青色」いわゆるウルトラーマリンの色を呈した海である。野水仙の三大群生地は、一般的には淡路島・越前海岸・南房総鋸南町と言われているが、伊豆下田・須崎半島先端の景勝地「爪木崎」には、三百万本の野水仙の一大群生地があるので、海の色と「海になだるる」の措辞から想像して、場所は爪木崎かと判断した。それについても本句は、観光ツアー会社の宣伝パンフレットさながらの物の見事なキャッチフレーズである。

秩父嶺のあくまで蒼き小春かな 曲淵 徹雄

秩父山系の嶺々を遠見した場所は何処であろうか。障害物の無いところとなると、熊谷駅に近い荒川の桜並木の土手がぴったりかと思うが、作者なりの穴場があるのかも知れない。もつとも、ビルや高層マンションの間から臨める嶺の姿も一興に値する。秩父の山々と同様に、作者も小春日和の日射しを全身に浴びて幸せを満喫している。「あくまで蒼き」が、その場の風景美を言い尽くしている。

絨毯の巻き癖取れぬ新居かな 日高 徹

カレンダールの巻き癖も然る事ながら、永年使わずに巻いて保管していた絨毯も、両端に重い家具でも置かないかぎり丸まってしまふ。作者が、ご両親が永年住んでおられた実家をリフォームして今春転居すると聞いていたので、多分それに纏わることであろう。絨毯という冬の季語を用いての日常句が、快く読み手の心に入ってくる。

牡蠣割女生臭きまま参観日 正木 萬蝶

浜に面した魚市場の片隅で、黙々と牡蠣を割っている女。身を飾ることもなく、目立った化粧もせず、日々の決まった流れに沿って仕事をこなしている。子を持つ母であるその女は、忙しい仕事の合間に子の授業参観に駆けつけた。その女に笑顔が戻る貴重な時間である。着替える暇もなく出向いたが、漁業に従事する親が多いのか教室の中が生臭いが、誰もあまり気にしない。一漁港を背景にした生活臭あふれる俳句である。

短日の時を指をり鳩時計 近藤 徹平

冬の陽が西に傾き、夕暮れが迫っている。辺りの静けさを破って鳩時計が時を告げる。子供の頃のように一つ二つ三つ…と、指折り数えているうちに、何時もとは違う世界に入り

込んだように楽しい気分になってきた。昔のぜんまい時計の
頃と同じように……。

惜別を十七音に年暮るる 越田 栄子

掲句の前に、「母逝きて抛り所なき年の暮」という作品があることから、句意は、亡くなられた母上への追悼の心と受け取れるが、さぞかし淋しさの募る年の瀬であつたろうと洞察しする。それにしても、実に繊細で滑らかな表現であることに感銘を受けた。

夢叶ふ日を数へつつ冬木の芽 野田 静香

作者自身か、それとも親族の誰かに、春の訪れとともに佳い報せが届くことを願っている。春の開花に向けて、寒さにめげず芽を育てている冬木のように、こつこつと着実に準備を進めてきた。後は結果を待つばかりである。

初雪や文士の顔で墨を磨る 河野はるみ

去年から今年にかけて例年になく全国的に雪が少なく、未だ初雪らしいものを目にしていな。この俳句は、初雪の降っている日、日本間の文机の前に正座し、ゆつたりと墨を磨る思慮深そうな人物を表している。「文士の顔」という表現が至極適切であり、また滑稽でもある。文士の顔を模索している作者の顔を想像すると、一段と親近感がわいてくる。

喧騒の街の灯遠く冬の月 宮崎チアキ

盛り場から離れている高台から、その街の夜景を遠望している様子が的確に伝わってくる俳句である。青白く輝く大きな寒月が、無言劇の舞台を引き立てる。

凧や傾ぐ道標傾ぎ読む 神田 治江

赤城おろしが吹き荒ぶ上州の裏街道を想像すると、この句がよく理解できる。かなりの歳月を経て半ば朽ち果てている道標。斜めに傾いている道標に身体を合わせて読み取ろうと苦心している人が居る。まさに時代劇映画の一齣を観る思いで、木枯し紋次郎や座頭市が現れても不思議ではなからう。

幕間の座席を守る冬帽子 洪谷さいち

二〇分か三〇分ほどの幕間であるう。離席した観客が座席に置いておいた冬帽子が、あたかも座席の番人であるかのようになに詠んでいる。男物にしろ女物にしろ、その帽子の存在感が重厚に描かれている。

片手袋踏みしだかるる駅階段 加藤でん治

通勤ラッシュ時によく見掛ける駅構内の光景である。用心深い人は、片方の手袋にもう片方の手袋を突っ込んでコート
の底深くしまいが、ほとんどの人は、無造作に両方一緒にボ

ケットに入れる。ポケットに入れる時から片方を落とすことになる。手袋の両方なら諦めもつくが、片方を失った場合は未練が残る。高級品だと尚更である。体裁ぶらずに、実用本位で百円シヨップの手袋を使う人が増えている。

餅の音絶えて久しき露地の奥 原田 秀子

昔は、関東や東北では伸し餅を、関西以西では丸餅を各家庭で搗いたものだが、現今では、製菓店に注文したり、一個ずつ個包装した切餅をスーパーで買うのが常になっている。子供の頃や娘時代に毎年耳にしていた餅搗きの音が聞こえなくなつて久しいことを、自分の歳に重ねている作者である。

人にそれぞれ背負ふものあり冬の月 熊倉千重子

人生それぞれ歳に応じて重ねてきた体験や苦勞があるもので、人間性を構築した基とも言えよう。冬の月夜の道を歩いていて、自分の背を通してつくづくそのことを感受した。

契約を済ませ冬帽キャンプリン 新 曆文

プロ野球セパ12球団の契約更改が終り、各選手がキャンプリンして本番に向けての練習に励むシーズンがやってきた。古参も中堅も若手も、また、前年のドラフトで晴れてプロの一員に加わつたルーキーもが、新たな気持で良い汗をかいている。輝かしい冬帽でのキャンプリンである。

拭き立ての窓に頬寄せ寒鼻 梅澤 輝翠

ガラスクリナーを吹き付けてびかびかに磨き上げた窓。暖房の利いた部屋の中から寒鼻を仰ぐ。一点の曇りも無い窓を通して冬の星が映えている。

石段のごと削られし山眠る 山戸 美子

句の形容から推察して秩父の武甲山の山容が目につかなくてくる。セメントの原料確保のために永年に亘つて採掘され、眺める場所によっては、もはや山とは言えぬ哀れな姿になっている。「山眠る」が一層憐れみを誘う。

冬木道港の見ゆる異人館 竹澤 和子

横浜の港を見下ろす丘の景であろう。冬木立の道を散策して古い異人館に至る。その館の庭から眺めた港の冬景色は、またまた作者の心に大きな感動を与えたことであろう。

冬ゆやけ小樽運河を赤あかと 千坂 平通

煉瓦倉庫が立ち並ぶ小樽運河は、映画や演歌の舞台となり多くの観光客に親しまれてきた。運河はぐんと縮小され、往時の面影は無いが、独特の雰囲気を持ち続けている。冬夕焼に染まった倉庫と運河。また新たな歌が生まれそうだ。

水琴窟

(水明集一月号鑑賞)

池田 雅夫

転た寝の手枕しびれ夜長かな

佐々木史女

秋よりも冬のほうが夜が長いのであるが、秋に夜長を感じるのは日本人の特有の季節感であるという。「転た寝」の心地良さは何ともいえない。手枕をして、いつの間にか寝入ってしまった。「手枕しびれ」に滑稽さが表われている。

捨案山子極悪面を晒しをり

水落 守伊

高浜年尾の句に「稲雀追ふ力なき案山子かな」がある。本句はそれとは逆に「極悪面」という。したたかな雀を威すには極悪面を頼るしかない。役目を終えた案山子は捨て置かれるのだが、極悪面のまま睨みを利かせているのだ。

持ち味をいくつも合はせ茸鍋

鈴木 和子

椎茸、しめじ、舞茸などの馴染みのある茸。香り松茸、味湿地などとも言われ、秋の味覚として親しまれている。また「茸狩り」で山林へ入ることも秋の行楽の一つである。数種類の茸を一緒に鍋料理で味わう。「持ち味」の措辞が絶妙。

屋上に登れば銀河我のもの

高原 和子

秋になると空気が澄み、それまでの暑さで見上げる余裕すらなかった夜空を目の当たりにしている。屋上に来てみたら雲のように連なっている天の川に感動したのだ。この見事な天の川を独り占めしていると思うと、一層美しく見える。

大南瓜終には鉦の力借り

川島 典虎

秋の味覚の代表的な野菜の一つで、栄養価が高く、ビタミン類も豊富である。大きく育ちすぎたカボチャの皮は硬くて包丁では切れず、とうとう鉦を持ちだして切るほどであった。日常の、ふとしたことも俳句にして楽しむ余裕を感じる。

天高し組体操のきびきびと

高橋満耶子

運動会の花形、リレーとともに注目される組体操。団体の美しさ、力強さが魅力である。ブリッジ、ピラミッド、塔など数々の見せ場がある。その軽快な動きと完成した型の美しさに魅了されている。危険だといって中止する学校も多い。

聞き分ける風音栗の落つる音

岡本 祥子

作者は若狭の人。栗の名産地・京都丹波に近い。風は吹きつけるものによって、その音もさまざま。その土地特有の風の音を聞き分けている。コトんと栗の落ちた音がした。

枯露柿を揉む手に染むる甲斐の風

諏訪サヨ子

「枯露柿」は「転柿」「胡露柿」とも書く。いわゆる干柿のこと。干柿は次第に固くなるので、頃合に手で揉み柔らかくして商品価値を上げる。広い作業場で黙々と揉んでいる姿が見える。吹き込んでくる甲斐の風は痛いほどに冷たい。

行く秋や白樺の幹くつきりと

外村 紀子

秋も過ぎ去ろうとする頃、山村や高原の木々は葉を落とし、幹と皮がむきだしになる。白樺の分布する高原の秋は短かい。すつかり葉を落とした白樺の幹が白く目立っている。「幹くつきりと」に、晩秋の澄み渡った冷気が漂っている。

運動会終へたる子等に陽の匂ひ

嶋田 洋子

「陽の匂ひ」の措辞に感心する。秋晴れの下、運動会の日、元気に走り回り汗をかいた子供たち。終わった後もその昂揚感が残っている。それを感覚的に「陽の匂ひ」と捉えた。子等を優しく見守る大人の心情までを言い表わしている。

秋晴や息を弾ませ介助犬

野村 美子

盲導犬をはじめ、さまざまに人を助ける犬が多くなった。特別な訓練を受けて人の生活を助けている。「息を弾ませ」の措辞から、走ることができる人なのだろう。有難や。

蝸や家路を急ぐ女たち

岡田 宣子

一般的に家事炊事を担う女性。それまでの寸暇を楽しんでいたが、蝸の声を聞き、「こうしてはいられない」と、夕餉の仕度にとりかかると、家路を急いだのだろう。日常の平凡な暮らしに幸福感が表われている。今夜のご馳走は何？

金の紗を下すがごとく秋夕焼

小山 敦子

「紗」は生糸で織った織り目の荒く、薄くて軽い織り物。「うすぎぬ」とも呼ばれ、夏の和服地に用いられる。秋の夕焼を金色の紗にたとえた感覚に感服した。錦に彩られた山々と夕焼け空が鮮やかな光景を醸しだしている。見てみたい。

秩父路のみぢトンネル人の列

武田 重子

長瀬の桜のトンネルは有名であるが、秋にはそれが桜紅葉のトンネルになることだろう。秩父には中津峡、浦山溪谷、入川溪谷など紅葉の名所がたくさんある。「人の列」をなして見るのは長瀬の桜通りの外に思い浮かばない。

子規庵の糸瓜みごとに七つ八つ

綿貫ひさの

子規絶筆の三句は有名。子規の忌日を「糸瓜忌」ともいう。それを踏まえて子規庵の糸瓜を詠んでいる。二つ三つでは寂しすぎ、「七つ八つ」と詠んで「みごとに」が生きた。

鼓

笛

集

山中順子選



お互ひに無沙汰を詫びる息白し
寒紅を差して同期と丸の内
白鳥や石垣高く高くあり

橋本 京子

煮凝やとろんと溶けて化かされて
ゴボゴボと湧く寒泉の底力
峠道ワルツのやうに舞ふ落葉
青き屋根止むに生まれぬ年の暮
庭園に令和言祝ぐ江戸囃子
蠟梅や令和の陽射し浴びて咲き

田中 章嘉

ミサイルの似合はぬ青よ初御空
初富士や湖水に浮かぶ鳥居は赤
玉砂利の白際立ちて淑氣満つ

日高 徹

麦飯の御焦げに醬油開戦日
一葉に似し人と逢ふ酉の市
出稼ぎの野麦峠に雪女郎

染谷 正信

樟脳の香ほの聞く春着かな
ひさびさに春の海ひく琴始
爛番は主の出番長火鉢

原田 秀子

寒空へジャズの余韻を同期会
テープより義父の謡の冴ゆるかな
空へ大きく両手広ぐる塔の冴ゆ

鈴木 玲子

滑り込む列車押し出すスキー客
昼灯す待合室は冬の駅
雪しまく悲しき嘘に発車ベル

野田 静香

老梅の十日も早い開花の報
初場所や若手台頭兆しあり
版画家は手づから摘んで蓬餅

長井喜代子

西幅 公子

ハプニングは旅の醍醐味冬の海
鳶が舞ふ鮪の生簀冬ぬくし
伊根湾の入り江に舟屋冬うらら

鈴木 和子

冬銀河われを励ます光なり
階段の手摺り光れり寒の月
自転車を走らす道や風花す

高原 和子

断水や隣と同じ関東煮
大寒や人影のなき給水所
大寒や断水予告空振りに

高橋満耶子

賑賑と元氣確認初句会
芹摘みし畑も宅地に久しけり
三つ目のくさめはぐつと噛みころし

寺内 洋子

此の上は住む人も無し雪女郎
笹飴せがむ背の童女よ雪女郎
駅の灯も雪女郎には明るすぎる

瀬戸雄二郎

新年の幸諸人に在ることを
年明けて書店に入荷復刻版
寒の入母校の定期演奏会

関谷多美子

寒稽古湯煙あげて滝つぼへ
初春や鯉と鴨との取り合戦
大蕪園児三人もてあます

南條きわゑ

晩酌に父の好物煮凍れり
耐へ忍び鮮やか増した寒牡丹
寒椿掃き清めたる今朝の庭

野村 美子

鼓笛集巻頭（二月号）

私の好きな一句（自句自解）

神田 治江

着ぶくれて母に似て来し苦笑ひ

兄弟の中の女一人として生を受け、幼少の頃より母の傍らで、母の為す事を見て来た様に思います。今は尋ねる伝を失いました。着脹れ姿を大切に、心に残して置きたいと思います。

鼓笛集作品評

山中 順子

お互ひに無沙汰を詫びる息白し
寒紅を差して同期と丸の内
白鳥や石垣高く高くあり

橋本 京子

冬の一日都会のある処で久しぶりに友達と会う作者の心の
昂ぶりが伝わってくる。お互いに吐く息が白いのもリアルで
ある。少し紅を濃くして会う相手は女性とは限らないかも。
丸の内がくすぐるように効いている。そしてお堀の白鳥が和
らかさを添えてくれる。久びさに俳句らしい落ついた句に出
会った。

ミサイルの似合はぬ青よ初御空

日高 徹

元旦の上空はやはり晴れて欲しい。どこかでミサイル発射
のニュースも流れているが、似合わぬの一言で青い大きな空
が力強く守ってくれるでしょう。令和は平和でいてほしい。

急告！

春の吟行会

延期のお知らせ

二月号でお知らせしました「春
の吟行会」は新型コロナウイルス
による肺炎の蔓延により十一月に
延期する事になりました。

詳細は追ってお知らせ致します。

主宰 山本鬼之介

俳誌望見

梅澤 佐江

『雲取』 令和元年一一・一二月号 通巻三〇九号

主宰 鈴木太郎 発行所 東京都西東京市

平成九年一〇月、鈴木太郎が東京で創刊。師系森澄雄。「伝統をふまえ、作品に、現代に生きる人間の感性と息吹を送る」を理念とする。(隔月刊)

主宰句「大呂」二〇句より

檣紅葉生きる習ひの輪の中に

さまざまな仕来たりの中で和を保ち生きている鄙の暮し、
絆の象徴のような檣紅葉の美しさが、訪れた作者を郷愁へと誘う。

冬瓜は母胎のかたち積み寄せて

(積み寄せて)の措辞が、いかにも胎児を育てている子宮のような冬瓜を慈しむ生命讃歌であり母への追慕とも。

菊贈なほ覚めぬ夢あるごとし

菊の香りを残し更に葉ざわりも加わった菊贈、(なほ覚めぬ夢)とは菊贈に重ねた作者の真情か、その香氣そのままに昇華された精神性。

行秋の鱻ひれ食らふ替女の国

厳しい冬が直ぐそこまで来ている。替女が日々の糧を門付けしていた越後の地で鱻ひれ料理を堪能している自分、自虐とは言え人間の限り無き生命力がそこにはある。

業平の武蔵野に住み若水を

滞在した業平と館の息女皇月の前との悲恋の伝説の地を踏まえ、武蔵野に住む作者は今厳肅な心持で神聖な若水を汲む。

泰雲集(同人Ⅰ) 二名 各一〇句より 一句ずつ紹介

しばらくは箸休めたりほととぎす 下條杜志子

引潮の波より生るる秋の蝶 鈴木多江子

八雲集(同人Ⅱ) 二七名 各八句より二名一句ずつ紹介

吊橋の揺れを涼しく渡りけり 物江 里人

冬瓜や晩年といふ淡きもの 宇野 理芳

彩雲集(同人Ⅲ) 一七名 各八句より二名各一句ずつ紹介

萍の花足元の暮れにけり 原 美知子

朝蟬に起こされ目覚む齡かな 三田 君代

積雲集 一五名 各五句より二名一句ずつ紹介

泡盛や摩文仁の丘の晴れ渡る 秦 五郎

指の間をこぼれ落ちゆく夏の朝 佐々木潤子

正に現代に生きる喜怒哀楽や切なさを感性豊かに詠まれて
いる。

創刊二二周年記念特集として、主宰の「特別作品」、同人
一名の「特別作品とエッセイ」、「記念俳句コンクール」の
受賞者作品及び選評、同人による「句集・俳書存問」「現代
俳句管見」と紙面も重厚で、更に主宰の「江戸俳諧博物誌」「山
彦抄Ⅳ」は、企画の面白さに興味津津で最後まで愉しませて
頂いた。

句集喝采

近藤 徹平

◆山崎十生 「未知の国」

文学の森

著者略歴 昭和二十二年埼玉県生。昭和三十八年「紫」主宰関口比良男に師事。平成十一年「紫」主宰。昭和四十年第一句集「上映中」。「未知の国」は第十句集。番外に「原発忌」含め四句集。現代俳句協会理事。埼玉県現代俳句協会会長。他多数。

著者「あとがき」によれば、東日本大震災に応じて詠んだ句「春の地震などと気取るな原発忌」が注目を浴び、番外句集「原発忌」をはじめ震災に関する作品を多数発表された。

今は昔などと原発忌の話

ダーズリンティー毎日が原発忌

籬少し緩みし海や原発忌

原発忌の恩恵何だったのか煮凝

冒頭から原発忌の句が並ぶ。東日本大震災では家族を津波で失った悲劇が数多報じられた中で、著者が敢えて原発忌に注目するのは当然とは言え敬意を表する。三句目は難解だが、「籬」を海底プレートと読めば災害は自然現象の津波で不可避の句意になる。原発組織の暗喩と読めば災害は回避できた筈との句意になる。東電福島第二原発、東北電力女川原発が同じ津波を撃退したのだから、技術が生業であった筆者は、後者について興味を持つ。

初御空なれど福島フクシマだ

句集の表題は「みちのく」と「未知の国」に出会えることを念じてつけた由。「みちのく」気質は極めて我慢強いが、限度を越えたとときマガマが噴出する。次の句集には原発忌にも従容として異郷へ避難している人達の心情に触れる句も期待したい。

◆山崎 篤 「いまを生きる」

幻俳句会

著者略歴 昭和三十四年奈良県生。昭和六十年「斑鳩吟社」入会。昭和六十一年「幻俳句会」入会。平成二年幻俳句会同人。平成二十六年幻俳句会同人代表。平成三十年斑鳩吟社副代表。現代俳句協会員。奈良県俳句協会員。大阪俳人クラブ会員他。

「あとがき」によれば著者は昭和五十六年斑鳩町役場に採用され、平成三十一年定年退職を機会に句集を刊行した。

アメリカは日本の隣青葉潮

小数点以下は切り捨て西瓜切る

解釈に違いはあれど菊を焚く

一句、昨今の日米・日韓の距離感を見ると頷ける。二句、

三句、枝葉末節に拘らず大局感を持っていた幹部を想像する。

駐在の飛び出してくる秋祭

黒鬼の叱られている追儺式

白靴や女教師のホイッスル

燈花会やナブキンの立つ予約席

大和には大和の匂い稲を刈る

一句、二句、三句、古代史にも登場する斑鳩の町の様々な行事には町民、訪問客に町の顔として応対する光景を想像する。四句、五句、古代に源を持つ奈良県に誇りを持つ句である。

大根の白さ貴方は無罪です

口語俳句も自在にこなす著者の次の句集を期待したい。

水明例会



第一例会（浦和）

茂木 和子
延昭 報

読初やドラマ仕立てのトップ記事
読初や書棚の中の風雲児
元日を風雅に過す侘住ひ
風見鶏つくねんとある寒日和
高高と風が風追ふ初御空
拍手の風切る音を恵方とす
春着の袂蝶の風情に振り行けり
箱根路の風を踏み行く冬マラソン
読初は漢詩でありぬ詩吟かな
風落ちて寒林星を飾りたる
読初や論語素読の声の張り
読初やどかんと届く新聞紙
読初は俳句歳時記電子辞書
すれ違ふ風のひやりと雪女

微 平
はるみ
由紀子
マスミ
光 弥
和 子
以上特選
喜 恵
チアキ
由紀子
マスミ
延 昭
はるみ
大場 順 子

第二例会（東京本所）

山中みどり 報
太田 絹映

読初とて彼の婚活の書は後日
車窓を見つつ「俳句歳時記」読初に
読初に探す俳句の古ノート
それぞれに校風のあり箱根駅伝
北風吹き飛びさうに風見鶏
読初は師の俳句本書棚より
妻丸く肥えて朗らか福寿草
濡れ縁の猫の居場所に福寿草
不機嫌な露天の親父福寿草
借金の形だと鉢の福寿草
約束の刻とうに過ぎ福寿草
女流棋士の指導を受くる四日かな
三角に日当る庭の福寿草

光 弥
理 恵
岡野 順 子
和 葉
徹 平
和 子
昌 弘
昭 子
竺 仙
鶴 城
みどり
以上特選
淑 江

「令和」とは冷たき音よ福寿草

第三例会（東京）

五明 昇 報
曲淵 徹 雄

日和みて時を得たりと福寿草
尾白鷺するどき眼風をよむ
福寿草咲かせて此の家あまたかく
会ふの文字逢ふと打交へ春隣
鍛練の一打の牙えや福寿草
頼もしき大外刈りや初稽古
玄関の光を集め福寿草
現金かカード払ひか去年今年
春告ぐる色で現れ福寿草
朝日浴ぶ二羽はつがひか初雀
零れをる波斯の金貨福寿草
恙なく令和を生さん福寿草
グラタンのチーズとろとろ福寿草
穏やかに笑めるお地藏福寿草
その声は十里劈く雪女郎
初空へ一番乗りのプロペラ機
漸うに正面を向く風の意地
福藁を仔牛に厚く敷きにけり
雪女郎輪廻転生せし母よ
その先は海ようどうする雪女
道行と洒落てみますか雪女
妻の仕草ふつとあの夜の雪女郎
平家谷へかかる眉月雪女

玲 子
昭 子
禮 子
竺 仙
鶴 城
陽 子
登 志 子
敏 江
峰 雄
寿 恵
昌 弘
みどり
絹 映
昇 報
雅 夫
祥 絵
由 美
康 世
萬 蝶
大場 順 子

風花や眼科医を出て歪む街

みどり

——以上特選

ぞくぞくと背後に迫る雪女

雪女少し年増の待つお店

勢ひて撥のはみ出るお書初

雪をんな十国峠越えて来る

雪女郎白無垢鉄火でありしとか

冬の霧口のほくれぬバスガイド

初富士を共に拝する人遠し

くれなるの紐を唾へて雪女

雑炊や長寿の眉の湿りかな

赤い櫛忘れてゆきぬ雪女郎

夜咄に尾鰭の付きし雪女郎

人日や列なして観る「ミイラ展」

値踏みする客の値を踏むずわい蟹

雅夫

理恵

祥絵

清

康世

徹雄

由美

大場順子

岡野順子

みどり

喜久

萬蝶

昇

第四例会 (浦和)

石井 境

喜恵 延昭 報

亀甲の鱗は吉兆鏡餅

湾一枚鏡の如し初景色

掛軸の富士の裾野に鏡餅

元号四つ生きて慙悻の初山河

据りよき令和の御世の鏡餅

名を知る川名知らぬ山の初景色

朝の歩に富士の近づく初景色

鏡餅の鱗割れにある脱力感

順子

歴文

光弥

昇

マスミ

光子

喜恵

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報

河野はるみ

若水や一齒も欠けぬ口漱くちすす

ゆるみなき花びら重ね冬薔薇

冬薔薇を娘と思ひ目をかくる

百咲きて百の明るさ冬薔薇

栄転の胸に華やぐ冬薔薇

歌舞伎町夜半に売られし冬薔薇

若水をふふみて五感研ぎ澄ます

五分咲きのままに乾びて冬の薔薇

水尾

義子

理恵

佐江

〃

〃

〃

〃

——以上特選

修

翔太

玲子

光子

延昭

昇

曆文

順子

寛治

恵子

マスミ

でん治

喜恵

若水や家長手馴れの腕捌き

人生は七転八起若井汲む

水神の清き祠や若井汲む

澄み渡るみ空に凜と冬のばら

西部屋に雷のままの冬薔薇

冬ばらを抱き飛び乗る夜汽車かな

若水の溢るる光福賜ふ

関西例会 (大阪)

大橋 森本

旭代 早苗 報

玲子

〃

ゆら女

〃

礼子

〃

早苗

和子

洋子

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

萬二郎

水尾

美佐尾

義子

はるみ

理恵

佐江

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

二日入初有馬芸妓の湯揉み唄
魂魄へ灯す青竹寒昂
山道の白木の鳥居初日影

小正月平等論も常の世に
兄弟商才ほめ合ひ屠蘇祝ふ

臘梅や空手胴着の生乾き
ふところに瓜坊あそばせ山眠る

成人の日や着付けに急ぐ午前四時

婦人会 (浦和)

西山貴美子報

寒疾風身を庇ふときうしろ向き
昨日から居る白鳥の大頭

あふむいて葉三錠寒の水
淋しさの蹲りある寒夜かな

寒餅や火伏の神の生一本
寒の扉の鍵の機嫌を確かむる

パシパシと叩く皺面寒の入り
足首の疼きに目覚む寒夜かな

寒明けを待ち幾度も眼鏡拭く
大寒の笛吹き葉缶鳴り通し

掲示板に白鳥飛来と子の喚声
温度計備へ鳥籠寒に入る

ピルの間を寒満月のあなかしこ
寒昂宇宙を監視する如く

寒紅をこれ見よがしにひけらかす

早苗

玲子

千津子

礼子

千枝子

道子

和子

迪代

さく子

由紀子

光子

順子

ひさの

貴美子

若松句会 (京橋)

菊池ひろこ
石田慶子報

一月の華やぎまとひ美術展
初御空真一文字の雲の浮く

一月や川の流れの変はりしを
松籟や一月の富士こそ秀麗

一月や老夫婦家のごみの高
原風景めく一月の床柱

一月の川疎開地をその上に

蘊蓄に飽く一月の酒宴かな
一月や喪中の友に会ひに行く

一月の刻は韋駄天走りなり
一月や切り札はまだ手の内に

一月や切りの泡の煌めき一月来
シャンパンの泡の煌めき一月来

駅へといそぐ背を一月の陽が押せり
祝ふこと多き一月吾も生れ

一月の声と光と無き匂ひ
一月の海賊船は錨あげ

君逝きて一月里の駅に立つ
一月の泩き金色銀座街

慶子

知子

月を

佐江

理恵

ひろこ

萬蝶

慶子

知子

理恵

鶴城

佐江

はるみ

千春

☆

☆

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

時間：午後1時から午後5時

(火・木・土・日・祭日は休み)

(上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内をお願いします。)

各地句会

水明松本句会 (松本)

兎見し熊に会ひしとつづら折り
月冴えて黒き影曳く樹のあまた
大雪と騒いで爆貫ひ肉さかな
水上の妖精たちの躍りの輪
これはこれはお節の海老が飛び交ひぬ

櫛の会 (浦和)

新年の顔にみなぎる子の決意
志野焼の「子」で床飾り初茶湯
沖かけて白帆は一つ大旦
五十年添ひて数の子噛みしむる
初場所や令和の太鼓勇み音
迫りあがる大さ火の玉初日の出
成人の日白襟巻がさんざめく
福笑ひ無口な父も仲間入り
出初式飛行機雲の生一本

恒子 陽子 マリス 玲子 寿子 朋子 富子 彰子 千重子 光子 萬二郎 裕之 克之 治子

阜月の会 (浦和)

日脚伸ぶ舟の影曳く佃島
風花の一つひやく襟元に
声高の下の道や日脚伸ぶ
バス停や彩雲流れ日脚伸ぶ
蠟梅にみくじを結び良き日待つ
日脚伸ぶカラス鳴くまで立ち話

円卓の会 (浦和)

冬ぬくし九十九島の巡航船
淑気かな参道を掃く巫女二人
骸掃く最北端の雪煙
先陣の戦士一掃初駅伝
寒寒寒痰の絡んでゐる鳥

花ごよみ句会 (浦和)

屋上に登らば富士の淑気かな
風花の気ままに舞ひて地に消えし
公園に子等の歓声風花す

蝸蚪の会 (浦和)

初日の出太平洋の光みち
朝日影初刷の文字照らしをり
急ぎ足七福神の昇り旗
五人の子揃ふ笑顔の賀状かな

静香 孝磨 カズ子 久子 曆文 さいち 翔太 徹 瑤蘭 鶴城 月を 和子 君子 ユリ子 さち子 礼子 宣子

新年を祝ふ一杯般若湯
利き腕の全力投球初硯
三才の児は三才の初硯

光が丘俳句教室 (東京)

シエバーの音の軽やか初硯
艶やかに目出度く曲るごまめかな
初神楽笛吹く巫女の片多くば
楽しみはつきたて餅と福袋
去年今年たとへば夢の続きかな
先づ父母の命日記す初硯

芙蓉句会 (浦和)

臘梅や傍点のごと香り立ち
最期てふ母の口癖初詣
母も又母に習ひしなづな粥
正月や鯛に塩打つ鼻眼鏡
帰国すぐお節を作る母と成り

あゆみの会 (浦和)

初硯墨の香残る奥座敷
筆始め師の短冊を手本とし
初硯手本を示す父の顔
初硯今年の夢を一文で
常用の筆滑らかに賀状書く
流行風邪戸棚の隅の常備薬

元美 鶴城 月を 守伊 康子 史子 野人 理恵 正子 道子 税子 美仁子 朋子 圭子 重子 山遊 藻好

りそな俳句会 (浦和)

五才児が百歳氣遣ふカルタ取り
松過ぎて官庁街をバイク便
初山河マウスで描く招き猫
留学生凶引きはしやく初詣
世の中は出たとこ勝負去年今年
お年玉そつと手を出す三男坊
荒れた庭見えないふりの去年今年
初競馬予想屋めでたき燕尾服
威勢よく街の四方へ初荷かな
銀嶺を茜に染むる初明り

鶴川山百合句会 (鶴川)

東南の定位置水仙今日も伸び
海暮れて水仙の香と波の音
ハンガーの白いマフラー皺無くて
うすき肩シヨールにかくす病かな
手編みのマフラーもて余したる夫である
雪中花海の匂ひの村に住む
手編みマフラーの父と手つなぎ母の笑み
母からのシヨールをかけて歌舞伎座へ
グレーヘアーの小粋なマフラー「君の名は」
いつもわたしをさけているでしよ水仙花
取れかかるピース気になる黒シヨール
碧き海へ意志それぞれに水仙花

柿の木塾 (浦和)

寛治 女正月少しの酒に惚気出て
曆文 甘味処の一日賑はふ小正月
徹 ふるさとも昭和も遠し小正月
萬二郎 小正月どつかと座る山の神
克之 寒林を抜け細身になりし気分
久美子 脳トレと筋トレはじむ小正月
建治郎 女正月友はりハビリ始めたり
雅夫 丸こんにやくにあそばれ北の小正月
マスミ 小正月肉をじつくり煮込みたり
大宮読売俳句教室 (大宮)

八洲男 名を呼んで見上ぐる背丈お年玉
雄二郎 嬰兒に振り返られて初笑
月を 初笑馳走囲みてハイチーズ
喜久 矯正の歯しばし忘れて初笑ひ
史代 初笑目もと弛びて静かなる
広子 お年玉開けずに部屋へ駆け戻る
知子 孫子等の集ひ弾ける初笑
由美子 お年玉渡す手受ける手浮かれる手
千春 正座して立てぬ娘や初笑
萬蝶 就職の孫から初のお年玉
理恵 すれ違ふ見知らぬ稚の初笑
玲子 お年玉紙のお金と喜ばる
年玉を与ふる笑まひ受く笑まひ

山茶花 (浦和)

かつ子 白菜の張りざくと切る手練かな
昇 胸に抱く破魔矢の鈴の音やさし
水尾 破魔矢持つ親子の肩で鈴が鳴る
俊晴 尻くらべ白菜積まれて日に光る
和葉 破魔矢うけ現況届出しにけり
恵子 白菜は鍋代表の団欒に
清 白菜は鍋代表の団欒に
光弥 詣で帰る破魔矢が続く人のむれ
和子 今年また神に頼りて破魔矢受く
きざきサークル (浦和)

徹雄 二業地のなごりの町や都鳥
卓郎 百合鷗空に五輪のインパルス
弘夫 裸木や大道芸にわく広場
サヨ子 都鳥暮れゆく海の役者なり
正信 裸木を抜ける風音胸騒ぎ
君夫 裸木や一枚となり頑張りて
利子 グランドに明るさ届く裸木かな
寛治 裸木や一枚となり頑張りて
翔太 遊覧船の右に左にゆりかもめ
典子 けやきの会 (東京)
治子 初富士を共に拝する人遠し
紀子 枯芝に降り天鷲絨の鳩の胸
順子 富士稜線たてがみの如雪煙

マスミ 泰子 光子 清一 美江子 嶺一 綾子 俱子 喜代子 啓子 タイ 千種 かつ子 和枝 和子 由美 祥絵 康世

水明熊谷句会 (熊谷)

御仏の口に引きたや寒紅を

寒紅や母の形見の化粧台

寒紅や鏡の中に違ふ顔

初場所や櫓太鼓の撥が呼ぶ

初場所の肌が輝く砂被り

初場所や小兵の勝ちにとよめけり

豪快に伯方塩撒く初相撲

化粧回しにふるさとがあり初場所

寒紅の美しき女の筆柔し

芽吹句会 (浦和)

初年や水に若やぐ岸の草

裏白のちぢれ具合のめでたさよ

初声や一対で置く石灯籠

乙女等のはつしはつしと初太鼓

復帰せし「福助」が淀初芝居

年の朝ポストに余る大見出

櫻蔭句会 (浦和)

煮ごりて魚の眼窩の安らげり

豆入りの寒餅旨し疎開先

寒林の梢に懸かる昼の月

ゴボゴボと湧く寒泉の底力

煮凝を家族で囲む朝餉かな

治江

裕子

栄子

徹平

和子

正子

秀子

燈女

茂子

茂子

チアキ

千重子

ひろこ

玲子

富子

徹

由紀子

美紗子

茂子

公子

多美子

耐へ忍び鮮やか増した寒牡丹

寒夕焼街を包みて一日終ふ

寒風やホテルの前は東シナ

境内の鈴の音乾く寒日和

寒紅引き役に成りきる立女形

野ばらの会 (浦和)

薺打つ真白き母の割烹着

冬晴や尖がる頂き八ヶ岳

小豆粥母の上手なほめ言葉

妻としてしきたり古りし七日粥

祖父らしくその朝に逝く寒の晴

古墳より見渡す町や寒日和

剪定の捗るリズム寒日和

青葉の会 (浦和)

道のりは遠き村へと冬の旅

冬晴や一直線の樗道

寒晴や滑翔ながく田園地

頬染めて父子で滑走スケート場

田んぼあと村で手作りスケート場

スケート場未来の選手息深く

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

賀状来る鉛筆書きの仮名の文字

冬の蠅免許返納そろそろか

美子

幸代

美智枝

真理

マスマ

秀子

夏江

茂子

治江

和子

栄子

みき子

美子

啓子

公子

洋子

和子

輝翠

延昭

美枝子

焼芋を割つて差し出す仲直り

水仙や凜と一輪佇みて

街道の仏に捧ぐ水仙花

石焼いの外科病棟の窓の下

野水仙叫ぶがごとき岬風

焼芋屋声尻高にビルの露地

健やかに生ける証の賀状来る

かわせみ句会 (浦和)

シルエットのあの人誰か夢初

初夢は枕の下に隠しけり

初夢のストーンヘンジを仰ぎをり

実万両猫が横目で通り抜け

束の間の日射しを受けて実万両

初夢や地球を眺め月旅行

初夢も現に返り全て失せ

初夢や何の秘密もありませぬ

狭庭なれど重ねし月日実万両

たかな俳句会 (川口)

探梅や婦系図のゆかりの地

黒猫のしつばゆらゆら鏡餅

探梅や合格祈願の頭数

るんるんと術後の裸眼梅探る

百選の水に親しむ探梅行

喜びも重ね供ふる鏡餅

正信

淑子

俊晴

光子

俱子

佳代子

昇

敏子

智子

順子

良枝

信子

友子

治郎

育功

義子

妃実子

鶴城

真知子

水尾

静香

桜林句会 (大宮)

黒豆の漆黒の艶淑気満つ
弾き初めやまづ胸中の絃鳴らす
松籟にこぼるる雀初日の出
弓始めきりりと結ぶ長い髪

花衣の会 (浦和)

手と足の指で握手の初湯かな
初写真シャッター頼む丸の内
初空や海の鳥居に潮満つる
初茜遠く山河に飛ぶ一羽
初空や両手を挙げて深呼吸
井戸端に蘭玉ゆれて母の声
初御空振り切つて行く新幹線

和歌山水明句会 (和歌山)

一笛のつんざくやうな能始
冬夕焼ばつぽつ灯るビルの窓
拝む事手を添へ教ゆ初詣
実南天のこぼれんばかり松と組む
パンドラの箱を開きて年新た
大蕪園児三人もてあます
墨の香をほのかに添へて祝箸
昨日までの企業戦士や日向ほこ
神官は色白短軀飾焚く

若狭水明会 (若狭)

電線をこぼれ落ちたる初雀
玉砂利の音も清しや春着の子
妻の座に樟脳の香や春襲
たらちねの母の春着を孫に着せ
矢を放つ櫛掛けなる春着の子
着る事のなしや春着を出して見る
一族の来て賑はしや初雀
初雀空へ義足の大ジャンプ
二つ三つ年若返る春着かな
上品に立居振舞ふ春着の子
解き帯にひと日のほてり春着かな

水明大阪俳句会 (守口)

蹲やほどよく濡れて敷松葉
子からもらふ年玉まづは仏壇に
丹田にひびく鐘の音年新た
こつそりとチキンラーメン三ヶ日
風呂上り火照りを冷ます六つの花
筆太の「多幸折」撥ねし初暦
初歌ひ湯屋に籠りて恙なし
新樹の会 (浦和)
寒林に鳥のひと声急ぐ道
冬葦主なき庭飾りをり

白銀の世界をつつむ初日かな

牧童の放つ口笛春隣
夜毎濡れいま透き通り冬葦
ひつそりと遠慮がち咲く冬葦
寒林や終のすみかに入り日差し
放牧の牛あたふたと枯野行く

神戸大池句会 (神戸)

万雷の拍手終らぬニューイヤ
新年会老を忘れし遊び事
願はくば胸に祈ぎ事初詣
幼児の風に優しき風の有り
珊瑚の会 (浦和)
研ぎ終へし包丁眠る寒厨
豆浸し明日を待てり寒厨
藁苞の中に地のもの寒厨
雪吊の妥協許さぬ縄の張り
雪吊りに身を任せ切る長寿松
寒厨皿のオムレツ朝の色
水桶に鯉の静もる寒厨
寒厨黒光りする食器棚
雪吊りの男結びも四代目
らあめん啜るをとこ鰯の寒厨
遠目にも雪吊り美しき男伊達
雪吊の中に空洞ひかり抱く

ゆら女
洋子
ヒサ子
智恵子
卓也
人美
敦子
初花
和風
白鷺
冬至
保人
鼓
郁子
寛久
ことは
祥子
想子
珊瑚

平通

京子

韶子

紅花

徹

でん治

玲子

礼子

千津子

早苗

廣子

和葉

かつ子

喜恵

マスマ

水尾

昇

恵子

光子

史代

和子

節代

代

節代

代

水明鬼石句会 (鬼石)

新しき五年日記の一頁

らふ梅の香にむかへられおくられて
大根の切り口乾く独居かな

嫁に来てたつたひとりの柚子湯かな
回廊の日本庭園雪蜜

離の会 (浦和)

日向ほこ短気と気長のみな長寿
左膝の違和感なるや寒波来る

初春や鐘の鳴りつく蔵の町
ぼつぺんと客を呼び込む老舗かな

我が町を囲む山々淑気満つ
ぼつぺんは小樽の漁師のみやげもの
臘のしこしこしこと寒波来る

はこべ句会 (浦和)

悪食をこゑに色にと冬の鳥
寒禽に温度の目盛り高くして

たそがれは産土色に冬の鳥
提灯の油紙の匂へり初不動

初芝居音羽屋「ずれて四方から
百二歳美はし戒名山眠る

寒禽のつんざく闇やほの明し
初釜や金継ぎ碗の謂れ聞く

ミモザの会 (横浜)

月牙ゆる東京タワー凜々と

探梅の枝垂れの先に屈み込む
芽ゆる夜の三味の音聞こゆ神楽坂

月牙ゆる見抜かれさうな恋心
月牙ゆる雨戸一枚残しおく
尾灯牙ゆデイズニランドよりの帰路

もやもやは頭の中に月は牙ゆ
寒の水光りて神の水となる
月牙ゆるまとも眠れぬ杞憂癖

水明小川句会 (小川)

年重ね読んで忘れ歌かるた
我が町を囲む山々淑気満つ

何やかや八十路の母の初鏡
しとやかな夕日含みて枇杷の花
初旅を見送る朝の幣揺れて

初茜五輪に染まる小列鳥
大根引く声高々と鴉鳴く
初売や鼠模るパン並ぶ

俳句の手ほどき (岩槻)

少年はパティシエ志望冬木の芽
生菓子の彩きはやかに春隣
皮衣ブライド高きハイヒール

和子 聡子 紀子 ナヲ子 洋子 燈女 佐江 喜恵 チアキ むら子 輝翠 かつ子 美代子 愛子 貴美子 さく子 久子 敦子 和子 光子

ここだけの話はじまる女正月

赤鼻を外し道化師おでん酒
抱かされて買うてしまひし兎かな
オペラグラスに主役引き寄せ初芝居

冬の燈や鞭轡の土の立ち上がる
寒燈のぼつんと一つ駐車場
人情と義理少し欠き小正月

餅花や家系図辿る大座卓
泣き笑ふ人情嘶根深汁

千代子 千春 史代 栄子 萬蝶 知子 由美子 慶子 玲子 重弥子

かつ子 徹平 水尾 義子 美佐尾 忠男 慶子 順子

☆ ☆

大相撲初場所観戦

青木 鶴城



出だしから両横綱の連敗で始まった大相撲初場所の千秋楽、国技館に水明関係者一九名が集まった。ちゃんこで先ずは腹ごしらえをして、席に着いたのが丁度十両力士の土俵入りのタイミング。

十四日目までの戦況は、両横綱が早々に休場して幕尻の徳勝龍が一敗、平幕の正代が二敗、大関の貴景勝が三敗で追う展開。

取組みが進み、正代が御嶽海に勝利して二敗を守った後の結びの一番、徳勝龍が貴景勝を破り初優勝。二〇年ぶりの幕尻力士の優勝、奈良県出身力士の優勝は何と九八年ぶりという歴史の一瞬に立ち会えて、参加者一同大満足。

表彰式と弓取り式の後の「神送りの儀式」(出世力士の手打ち式、御幣を持った行司の胴上げ)まで見守って国技館を後に。

残念なことに優勝パレードはカメラのフラッシュと人込みの中を力士の髻のみが通り過ぎて行きました。

初場所や化粧回しを晴れ着とも

腰細き行司の背中足袋踵

初場所や幕尻優勝夢与へ

初場所の爆発声や下克上

声援の沸く初場所の小兵かな

初場所の声援うねり勝負つく

挿鉢の底にドラマや一月場所

初場所楽出世力士の白き肌

初場所や涙あふるる初優勝

初場所や主宰夫人と観戦す

初場所や起立し我も君が代を

初場所や掛声飛びて活気付き

初場所やうれし涙の大賜杯

初場所や小兵力士の技の数

初場所や小兵飛び行く砂被り

初場所や力士入り待つ南門

歓声やお国訛りの初相撲

初場所へ女将率ゐる若旦那

鬼之介

月を

美智枝

公子

栄子

真理

慶子

はるみ

静香

でん治

京子

清吉

紅花

徹

理恵

宣子

元美

鶴城

新春俳句大会の記

野田 静香

新春俳句大会は令和二年一月三十日、さいたま市民会館うらわで催された。

世間では新型コロナウイルスが騒がれている中、五十六名が集い、熱気あふれる盛大な新春俳句大会となった。

兼題は二句「初につく新年の季語」

「当季雑詠」

十時 受付

十一時 投句締切

十二時 開会

司会進行

開会の言葉

主宰の挨拶

明けましておめでとございます。

今年の水明創刊九十周年のお祝の年です。

心をつにして頑張りましょう。

選句 主宰は多選

雪欄作家は十句

一般選者は五句

披講

近藤徹平

茂木和子

続いて主宰による普通選、準特選、特選、天地人の披講が行われた。その後、主宰揮毫

の色紙と短冊や賞品が授与された。

閉会の言葉 星野和葉

懇親会

同会場にて三時より始まる。

司会 五明 昇

乾杯 吉住光弥

受賞者の方々から喜びの声が披露された。

主宰詠

つがなき米寿の十指初鼓

寒林を鎮撫したるや秋田犬

主宰選

天

初暦めくれば未来動き出す

地の甲矢が凶星を射貫きけり

野のものは野に烟らせて冬景色

一人

特選

一の糸締めて寿ぐ初稽古

詩心また早梅探る女坂

春近し小さき帆の立つオムライス

初天神角の欠けたる石の牛

火種にも灰神楽にも淑氣満つ

航跡も末広がりぞ初日の出

初日の出富士に仕上げの紅をさす

かつ子

昇

喜恵

孝磨

ひろこ

水尾

下川光子

準特選

作り顔の女将と出会ふ初詣
 初春や金糸銀糸の手組紐
 神懸かる令和式年の初相撲
 くるくると春が近づく炒り玉子
 水明の卒寿言祝ぐ初句会
 初鏡もしも整形するならば
 初湯してまづ一憂を流しけり
 春着の子爪立ち覗く飴細工
 ふる里のなまりも土産初仕事
 手袋の中に手袋始発駅
 岩礁に孤高の海鷗初景色
 二拍して神代の国へ初詣
 初旅に誘はれ古地図しのばせる
 初御空まだ傷みなし翳りなし
 初詣水かけ地藏水にやせ

普通選

節代 大場順子
 徹 京子
 昇 京子
 恵 喜恵
 子 茂子
 清 玲子
 信 正信
 さいち さいち
 マスミ マスミ
 美代子 美代子
 山中順子 山中順子
 延昭 延昭
 克之 克之
 公子 公子
 光弥 光弥
 鶴城 鶴城
 京子 京子
 徹平 徹平
 鈴木和子 鈴木和子

山に斜光の影落とす冬木凜
 初鶏に令和二年が明けゆけり
 静の渦在り在り映す初景色
 初耀の符丁に活気夜の明くる
 一の矢を空へつがふる初山河
 嫁が君さぞや御供へおいしかろ
 反射炉の聳ゆる伊豆の山眠る
 初松籟を引き締めて一の鳥居
 初旅の迷ふ小路の美人パー
 群れ鳩の反転一閃初御空
 初御空九十周年の夜明かな
 瀬がしらのきらめき躍る初明り
 初荷旗向かう鉢巻男衆
 名を決めて祖父となる日の初曆
 初空や茜と藍と富士山と
 初御空指呼に立つ富士父性めく
 寝てる間に雪降りやみて子の嘆き
 初夢と現の汀句を拾ふ
 初明り沼杉の影宿す沼
 初場所や息詰め目据え大一番
 初明りして永劫の刹那かな
 屋敷神祭るあたりや初声す
 初夢の仕事に追はる吉ならむ
 初大師奥の院にて願ひ決む
 煮こごれる眇の魚の身の白さ
 青空に雪吊り開く江戸庭園
 初空や白銀朝日輝ける

治江 初アキ
 茂子 茂子
 節代 節代
 栄子 栄子
 翔太 翔太
 和葉 和葉
 さいち さいち
 マスミ マスミ
 水尾 水尾
 義子 義子
 松本光子 松本光子
 暦文 暦文
 でん治 でん治
 玲子 玲子
 俊晴 俊晴
 ひろこ ひろこ
 徹雄 徹雄
 美智枝 美智枝
 ひさ子 ひさ子
 和子 和子
 茂木理恵 茂木理恵
 はるみ はるみ
 由紀子 由紀子
 下川光子 下川光子
 平通 平通

寒鴉電線たわみ離れをり
 初耀の大間の鮎話題呼ぶ
 稜線を重ねて深き初山河
 初売りの鮮魚の声の宙に舞ふ
 冬日和ランチタイムで盛り上がる
 ビルの間に真白き富士や初句会
 初髪をやさしくほぐす看護帽
 初夢やゆるりと母の舞姿
 初霜や野菜畑の薄化粧
 編み上げる馬の鬣騎始
 どの手にも軍手新し朝焚火
 初参りひしめく山気仁王立つ
 歳問ふはご法度なるぞ初電話
 寒鯉を仏頂面と見てゐたり
 亡き人の思ひが届く雪椿

清吉 清吉
 章嘉 章嘉
 真理 真理
 愛子 愛子
 美子 美子
 孝磨 孝磨
 清 清
 美紗子 美紗子
 修 修
 恵子 恵子
 正信 正信
 カズ子 カズ子
 寛治 寛治
 美代子 美代子
 静香 静香

高得点者順位
 一位 石山 かつ子
 二位 越田 栄子
 三位 山中 順子
 四位 大塚 茂子
 五位 五明 昇
 六位 保坂 翔太
 七位 矢島 清
 八位 石井 喜恵
 今年は今までにない高得点が出た。

水明創刊 90 周年 記念祝賀会・全国大会のご案内

■記念全国大会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 9 時 30 分 開会 10 時 閉会 15 時 30 分
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルプリンセス A・B」
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町 2-5-1 ☎048-827-1111
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞、記念特別作品
の授賞、新誌友紹介者の表彰、新季音同人、新同人の紹介、
兼題入選句の発表・受賞・講評など

■記念祝賀会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 15 時 30 分 開会 16 時 閉会 19 時
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルクラウン A」(住所、☎は全国大会に同じ)
行 事 来賓挨拶、俳壇著名人のビデオメッセージ、大福引大会など

■参加費 (5 年前の水明 85 周年記念祝賀会・全国大会と同額)

記念全国大会・祝賀会 25,000 円 (昼食付き)
記念全国大会のみ 8,000 円 (昼食付き)
記念祝賀会のみ 20,000 円

■宿泊斡旋

宿 泊 日 令和 2 年 6 月 28 日 (日) および 29 日 (月)
宿 泊 先 ロイヤルパインズホテル浦和
宿 泊 費 シングル 11,500 円 ツイン 10,500 円 × 2 = 21,000 円
*ともに朝食・消費税・サービス料込み
*料金は令和元年 7 月現在のものです、今後変更の可能性あり
*支払いはチェックイン時にホテルへ直接お願いします

■申込み締切 令和 2 年 6 月 15 日 (月)

◎減多に無い貴重な機会です。ベテランはもとより、新入会員の方々も
お誘い合わせて多数ご参加下さい。みんなの力で祝賀会・大会を盛り
上げましょう。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

水明創刊 90 周年 記念特別作品募集

記念祝賀会・記念全国大会のご案内の通り、水明創刊 90 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ、評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外はどなたでも応募できますので、奮ってご投稿下さい。なお、受賞者の表彰は 6 月 29 日の記念全国大会で行います。

応 募 要 領

【応募資格】 選考委員を除く全ての水明会員。

【応募部門】 ①俳句作品：30 句（400 字詰原稿用紙を使用）

②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 6 枚程度）

③評 論：1 篇（400 字詰原稿用紙 12 枚程度）

◆原稿用紙は各部門ともに、タテ書き用 B 4 判 400 字詰を使うこと。

◆文字は、選考委員が容易に判読できるよう楷書で丁寧に書くこと。ワープロやパソコン入力による原稿も可。

◆いずれも未発表作品に限る。（水明誌および外部に発表した作品は不可）

◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）を書き、その下に姓名（俳号）を書く。

◆複数部門への応募も可。

【応募締切】 令和 2 年 3 月 31 日

【作品送付先】 〒 339-0067 さいたま市岩槻区西町 5 - 6 - 38

山中順子 宛 *「記念特別作品」と朱書する。

【選考委員】 主宰・山中順子・星野和葉・境延昭・五明昇・網野月を

◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、授賞者を決定します。

【授 賞】 俳句・エッセイ・評論それぞれの部門に授賞します。

正賞：各部門とも賞状と副賞 5 万円

準賞：各部門とも賞状と副賞 2 万円

◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 山中順子 (☎ 048-756-1253) へお願いします。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

風 声

○俳壇一月号―「現代俳句の窓」欄に「秋の声」と題する吉住光弥の六句。

日本海に加賀百万石の水落とす

光弥

即身仏祠に雨の白桔梗

亭主亡き茶室の庭に秋茗荷

師も父もむかし討死濁り酒

菊贈もつてのほかの歯ざわりで

「もつてのほか」…食用菊の別名

虚貝の笛吹く浜や秋の声

○現代俳句一月号―「現代俳句の風」欄

冬めくやカフエ灰皿の色ふやす

ライン冬霧国境の橋は歩いて渡る

立冬や硬筆の文字硬く書く

菊池ひろこ

永野 史代

野平美紗子

○文芸埼玉（埼玉県教育委員会・さいたま文学館）第一

○二号―俳句欄に「青春後期」と題する五明昇の十句。

身の棘も納めて帰る針供養

春泥をものかは牧の放れ駒

種袋美しき明日の音すなり

何時だつて青春後期柿若葉

カクテルにとさめき添ふる桜桃

マドンナも騎士も老いてソーダ水

新涼やエスプレッソをもう一杯

朝顔や失意の時も泰然と

宿坊に湯冷めを癒す般若湯

槽の火やいぶりがつこの噛み心地

○くちら（中尾公彦主宰）一月号―「受贈誌美術館」欄

晩秋の夕陽あまねく水車小屋

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）一月号―「受贈誌拝見」欄

行きつけの来來軒の秋灯

鬼之介

○翎（山本一步主宰）一月号―「受贈誌の一句」欄

点滅の止まぬ門灯秋暑し

曲淵徹雄

○新月（松田碧霞主宰）一月号―「受贈俳誌紹介」欄

散り初むる萩を片方の冠木門

鬼之介

○雪嶺（石本雪鬼主宰）二・三月号―「受贈誌より」欄

思ひかよへば鈴蘭の鈴鳴ることも

鬼之介

近松の芝居がはねて十三夜

○太陽（柴田南海子主宰）一月号―「一誌一耀」欄

散り初むる萩を片方の冠木門

鬼之介

○天穹（屋内修一主宰）一月号―「主宰句紹介」欄

散り初むる萩を片方の冠木門

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）一月号―「諸家近詠」欄

散り初むる萩を片方の冠木門

鬼之介

○白鳥（高松文月主宰）一月号―「受贈俳誌より」欄

砥石の音続く無月の一軒家

鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）一月号―「諸家近詠」欄

誰がための拳手の札かな秋の海

鬼之介

（五明 昇抄出）

水明発展基金御礼

(敬称略)

— 令和二年一月三十一日現在 —

松井由紀子	5	矢作	水尾	1
加藤むら子	5	森川	義子	1
小倉 倭子	5	大塚	茂子	1
野口 和子	3	越田	栄子	1
網野 月を	100	星野	和葉	2
鈴木 康世	10	井口	俊晴	10
河原 叔子	8	野田	静香	1
鈴木 貴水	10	石山	かつ子	10
(小計 146口)		大村	節代	1
		矢島	清	5
		松本	光子	2
		茂木	和子	3
		染谷	正信	1
		高島	寛治	1
		山中	順子	5
		山本	鬼之介	3
		内田	恵子	2
		(小計 59口)		
		— 合計 205口 —		

俳句

3月号 予告

2月25日発売
予価(本体864円+税)

特別作品 — 小川軽舟・井上康明・山西雅子

俳人約2300人 大アンケート 私の座右の書

句集・俳書の中から「座右の書」とその理由を一挙大公開!

攻略! 「春の」が ついた 春の季語

実用特集

▼ ほかの季語との差をつける

「動かない季語」にするコツを伝授!

春の月・春の雪・春の雨・春の空・春の風・春の山・春の海・春の土・春の泥・春の風邪・春炬燵・春の猫 ほか

第8回 星野立子賞発表! 受賞作30句抄 ほか

第14回 角川全国俳句大賞発表

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

後記

秋子先生、嵯迷先生、星野紗一先生、星野光二先生、四先生の忌を、二月二十三日三十七名の参加を頂き市民会館うらわに於て修することが出来た。今年は暖冬のため雪もなく四月頃の気温であった。参加された会員の中にはこの諸先生方をご存じない方が多いため、主宰からご挨拶の中でエピソードを込めながらやさしくお話頂いたことは更にこの会が有意義になった。そこでもう一度読み直そうと思ひ嵯迷先生著の「風蘭の帖」を開いてみた。序に秋子先生が母かな女先生と話し合いながら昭和41年から44年9月までの三年間の連載を紹介されている。あたたかくそして流れるような文にしばし夜の更けるのも忘れて読んでしまった。昨日の水明忌に飾られた遺影が私の脳裏をもう一度叩いてくれた気がする。

乗り越えたいと思います。(順子)
近くの公園で陶器市が開催されていくので行って見識のない私だが行つて見る事にした。テレビ「スカレット」の影響もあって大変な込み様であった。沖繩から関東までの焼物が展示即売されていた。信楽焼の手頃な可愛い狸が有つたら欲しいなどと思つて探したが無かつた。やはり本場へ行かなければ駄目かなと思ひ乍ら歩を進めて行つた。若狭の箸も沢山出ていた。若狭には友人もおり、旅行のお土産などで若狭に縁のある私には、とても懐かしく訪れた当時の想いがふつと過つた。結局何も買わず出口に歩を進めた。その出口でガラスの首飾りに目を止め買つて帰つて来た。いい気分であらう。家に着いて気が付いた。マスクもしいないで出掛けた事。普段マスクの癖がついていない私にとつたの大失敗。コロナウイルスの感染に対する認識のなさ。喉がこすれる程の嗽、指が痛くなる程の手洗い、既に後の祭りか。反省しきり熱の出ない事を祈る私で

ある。(和子)
半月ほど前、一本の菜の花を頂いた。莖は太く、花も葉も大きい。早速コップに差したら台所が明るくなった。四、五枚の大きい葉は茹で、からし醬油和えにして夕餉の一品となつた。あまりにも花が綺麗だったので、その後は食事が出来なかつた。その内、散り始めた花を切つたら蕾が五つも出ており、今だに楽しんでる。
相変わらず気温の変動が激しく、一ヶ月程先へ行つたり戻つたり、人間はまごまごしているが、草木はそれなりに芽を出し始めた。
「芽吹き」という言葉が明るい先が見えて好きだが、歳時記には「芽吹く」はあるが「芽吹き」はない。芽吹く木の芽は多々あるが、一括して「木の芽」なのである。傍題にはいろいろあるが、これから春本番遅速はあるが詠み時である。萌黄色に芽吹いた枝垂柳の揺れている様は何とも言えない。そしてその下を通る時、どうしても触れてみたい気がする。(和葉)

水明

令和二年三月号

通巻一〇七四号

令和二年三月一日発行

発行人 山 本 鬼 之 介

〒330-0073 さいたま市浦和区元町一丁目一八
電話 048-1886-1600三

発行所 水 明 俳 句 会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四丁目二二
電話 048-1822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一八九三九三

印刷所 中 央 美 版

水明全国大会参加申込書

〈申込締切 6月15日(月)〉

1. 記念全国大会・祝賀会参加 6月29日(月) 会費 25,000円
2. 記念全国大会のみ参加 6月29日(月) 会費 8,000円
3. 記念祝賀会のみ参加 6月29日(月) 会費 20,000円

- ~~~~~
4. 宿 泊 幹 旋 〈シングル・ツイン〉 ホテルで個人精算
※上記の希望項目の数字並びに宿泊幹旋ご希望の場合は、
シングル・ツインのいずれかを○で囲んで下さい。
但し、シングルの希望者が定員を超えた場合は、ツイン
にさせていただきます。
※前泊をご希望の方は必ず明記して下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

※なお、参加費を振込で別途送金される方は、下表の
「申込金支払方法」の振込を○で囲んで下さい。

2020 年 月 日

住 所	〒		
氏 名		電 話	()
申込金支払方法	現 金	振 込	

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)
水明俳句会

季音抄

山本 鬼之介

一月や川の流れの変はりしを
暮れ切らぬ空は喪の色虎落笛
ぬくさうに枯れてゐるなり葦の原
胎の子と越ゆる国境去年今年
尺八の一音狂ふ小正月
提灯の油紙の匂へる初不動
熨斗つけて拝みたきかな初御空
榛の木の瘤に捕まる春の雪
高高と風が風追ふ初御空
冬ざるる古墳の錠の新しく
過去を知る手鏡胸に雪女郎
初詣牙の失せたる鬼瓦
五分咲きのままに乾びて冬の薔薇
岩礁に孤高の海鵜初景色
父泣かす成人の日のうなじかな
冬ぬくし診療室の招き猫
小正月どつかと座る山の神
平家谷にかかる眉月雪女

網野 月を
石井 喜恵
石山かつ子
大橋 廼代
大村 節代
栢尾さく子
藤澤 喜久
鳥羽 和風
丸山マシミ
田寺 玲子
森田 祥絵
森本 早苗
梅澤 佐江
井上 玲子
野口 和子
松井由紀子
井口 俊晴
大場 順子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄 山本 鬼之介

虎落笛父の右手は戦場に
 枯園やおとぎ噺の蜜と毒
 聖夜かな胎児はなべてさかさまに
 群青の海になだるる野水仙
 秩父嶺のあくまで蒼き小春かな
 絨毯の巻き癖取れぬ新居かな
 牡蠣割女生臭きまま參觀日
 短日の時を指をり鳩時計
 惜別を十七音に年暮るる
 夢叶ふ日を数へつつ冬木の芽
 初雪や文士の顔で墨を磨る
 喧騒の街の灯遠く冬の月
 凧や傾ぐ道標傾ぎ読む
 幕間の座席を守る冬帽子
 片手袋踏みしだかるる駅階段
 餅の音絶えて久しき露地の奥
 人にそれぞれ背負ふものあり冬の月
 契約を済ませ冬帽キャンペーン
 飛永 鼓
 青木 鶴城
 大塚 茂子
 保坂 翔太
 曲淵 徹雄
 日高 徹
 正木 萬蝶
 近藤 徹平
 越田 栄子
 野田 静香
 河野はるみ
 宮崎チアキ
 神田 治江
 渋谷きいち
 加藤でん治
 原田 秀子
 熊倉千重子
 新 曆文

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中美どり 太田 絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明 昇雄 曲淵 徹
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境 延昭 石 井 喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水 明 発 行 所	山本鬼之介	梅澤 江み 河野 はる
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉 代	森 本 早 苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水 明 発 行 所	山 中 順 子	西山 貴 美 子
若松句会	第1土曜・午後1時	京 橋 区 民 館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石 田 慶 子

水明例会案内

水 明 令和二年三月一日発行 毎月一日発行

(第九十三巻 第三号) 定価 一〇〇〇円